

日田歴史
完

特31.

377

026288-000-8

特31-377

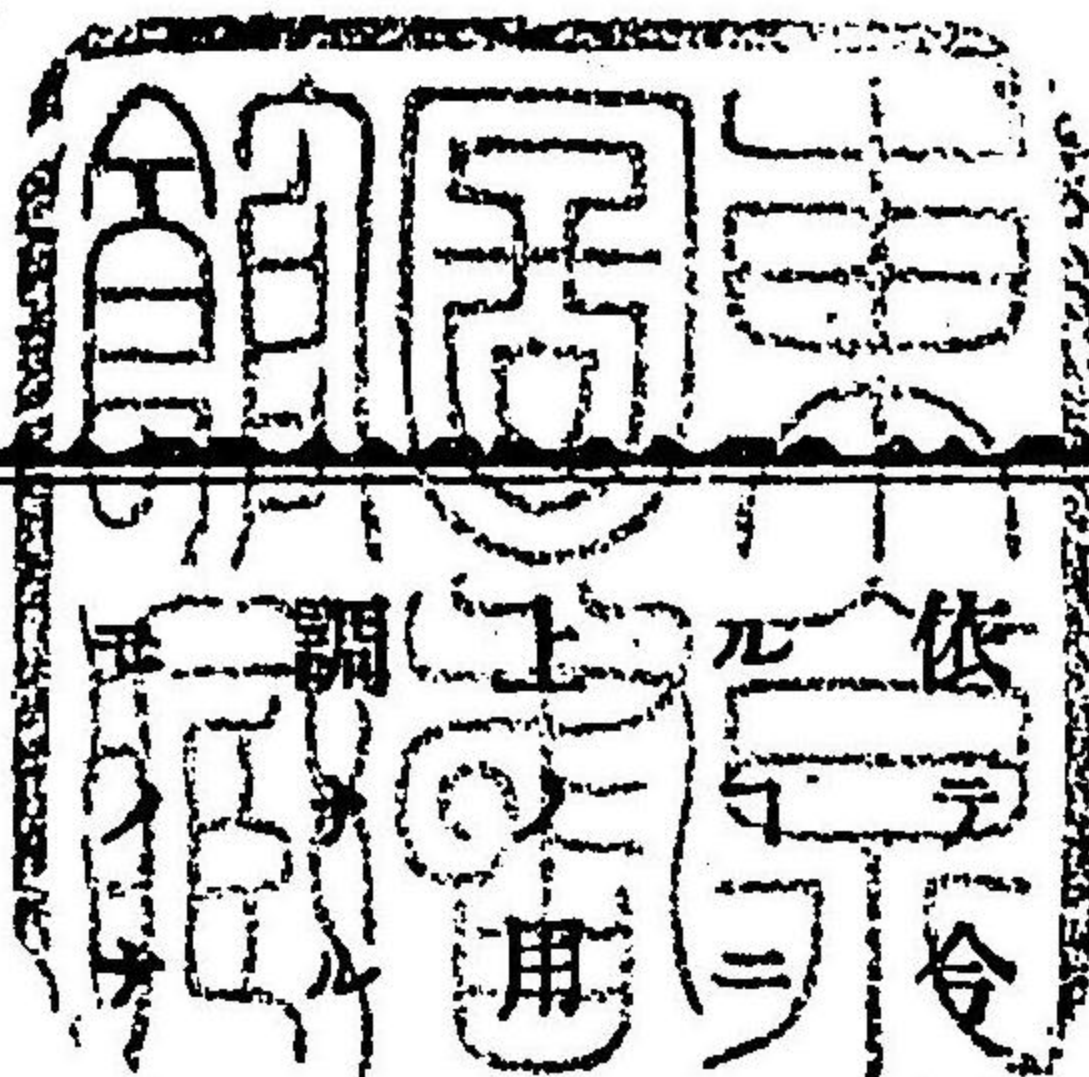
日田歴史

小野 藤太 / 著

M27

ADC-4066





日田歴史緒言

予ハ昨年、教授上ノ便利ヲ計リ、一學年ノ爲ニ、高等小學
 及ビ隈豆歴史ヲ印刷セシメタルニ、至極都合ヨカリシ、
 依テ令又其轍ヲ踏ミ、二學年ノ爲メ日田歴史ヲ印刷ス
 ルヲ命ジ、而シテ其文体ハ前書ノ記セル如ク、歴史
 ナリ、方言ニ近キ俗詞トナセシモアリ、變格異
 モアリト雖モ、只管事實記憶ノ便ヲ計リタル
 各其ノ道ヲ以テ論スル識者ノ譏ハ決シテ
 甘セザルナリ、予ハ初ト終ノ文体ニ、大分差ヲ付タリ、是
 進歩アツテ自ト不都合ナカラシムレバナリ
 本書ヲ四編ニ分タルハ、別ニ意味アルニアラス、唯小試
 業間ノ配當ヲ巧ミタルナリ

第一編ハ原口君ノ草按ヨリ採翠セシモノ多シ、聊茲ニ
記シテ、同君重賜ト功勞ヲ謝ス

明治二十七年三月十日、海寄宿舍樓上ニ於テ

小野藤太誌

日田歴史 目錄

第一編

名稱 地理 日田郡誌歌 大古穴居時代 上古國
造時代 中古王朝時代 附 雜說推斷

第二編

豪族時代 附 大原八幡 大藏氏繼嗣之亂 平家追逐
元寇之役 淑姪之爭 日田大友家 八郡老及高瀬
合戰 宮木氏日隈城 領主毛利氏 小川氏月隈城
大坂陣 領主石川氏

第三編

眞宗西派再興 享保之大飢 減稅愁訴 鹽谷之治績



代官之末路 久保田氏出奔 代官庄屋 租稅
教育宗教 風俗 日田文學

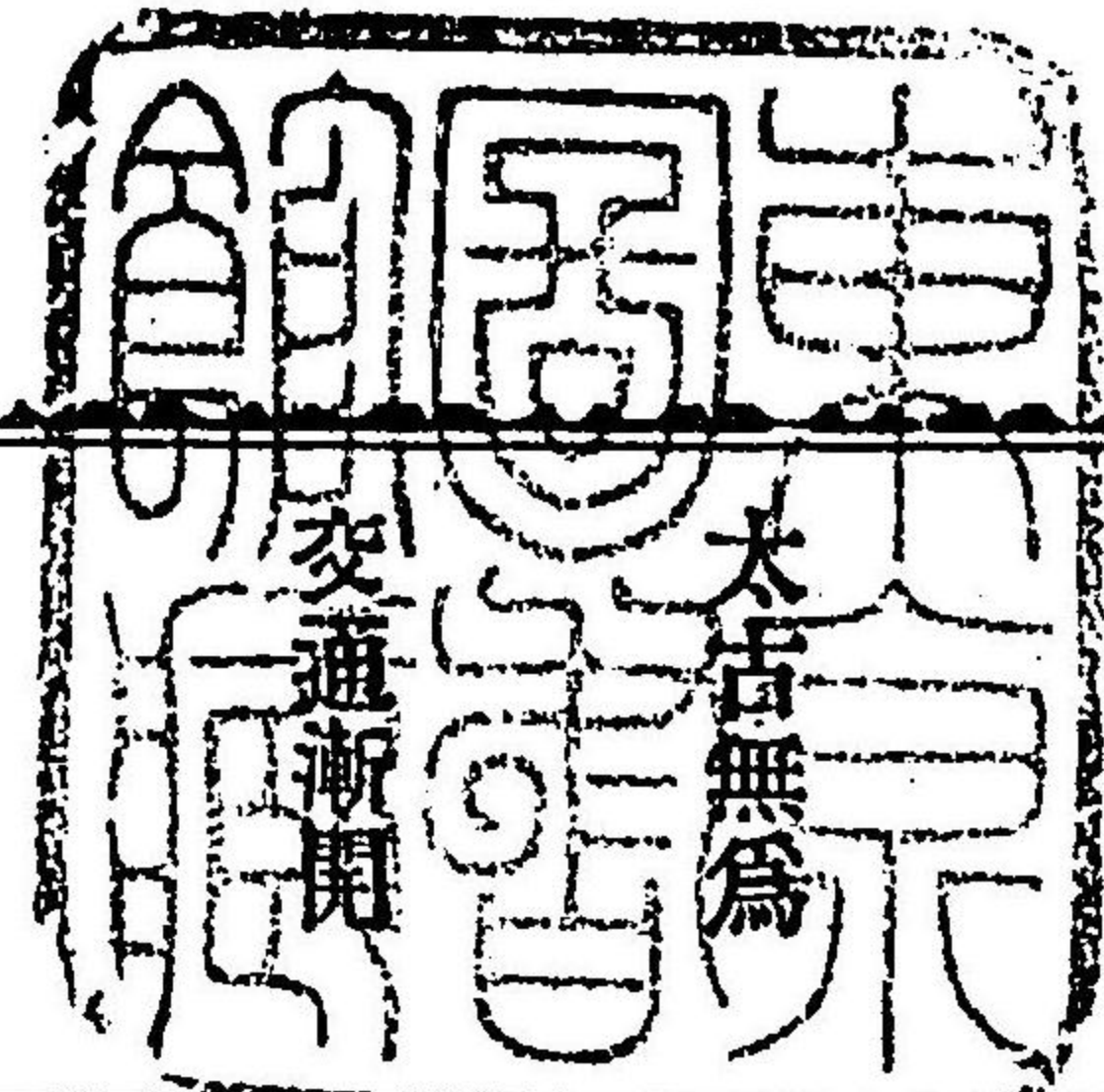
第四編

維新改革 暴動 廢日田縣並新令 地租改正
徵兵令 地方警察 郵便電信 郡有金紛議
町村自治制 郡會縣會 大山道路紛議 憲法政治
銀婚式園遊會 附記

大尾

日田歴史一

名稱



太古無爲

交通漸開

地名ノ必要

太古無爲ノ時ハ、世ノ中ノ事柄至テ手易ク、各其ノ土ニ安シテ、交通スルヲ至テ稀ナリシ故、地方ニ名稱ヲ付スルノ必要ハナカリシガ、人文漸ク開ケテ交通モ段々繁クナリ、此地ノ人が彼ノ地ニ品物ヲ持テ行クヲモアリ、或ハ他ノ酋長ガ此方ニ侵入ルヲモアリ、カタカタ地名ガナクシテハ不便ニナツテ來マシタ

地名ノ起因

全体地名ヲ命ケルニハ、色々ノ起因ガアリマシ
 テ、或ハ土地ノ形ニヨルトカ、或ハ名高イ物産ニ
 ヨルトカ、又ハ其ノ土地ニ起ル事實ヲ用ユルト
 カ、又ハ其ノ土地ニ住ンダ人ノ名ヲ用ユルトカ、
 時トシテハ何事モナク不圖言出シタノガ、後ニ
 ハ其ノ土地ノ本名トナルトモアリマス
 サテ日田ト云フ名稱ハ、ドナシテ起ツタカト云
 フニ、古來ダシトシテ説ガアリマスガ、其ノ中デ
 ナト思フノハ、風土記ニ書テアルノデ、上古景行
 天皇サマガ熊襲ヲ御征伐ナサルトキ、筑紫ノ行
 宮カラ此地ニ御幸ニナツタノチ、此地ノ酋長比
 佐津媛ガ迎ヘ奉リマシタ、由リテ此ノ地ヲ比佐

日田ノ名稱

比佐津

比多

日田

津ト云イシチ、後ニ訛リテ日田トナツタトノ
 デアリマス。又其文字ハドナデ、アツタカト云フ
 ニ、昔ハタゞ萬葉假名デ、比多トカキ、後ニハ色々
 ト説ヲ附ケテ、日鷹トカ、肥田、又ハ日高、日向等、書
 キタルモノアレド、元明天皇ノ和銅六年ニ、郡郷
 ノ名ハ好字ヲ撰フベシトノ令アリシトキ、定メ
 シモノニヤ、風土記ニハ確ニ日田ト記セリ、左レ
 バ本郡ノ名ハ元比佐ヨリ、比多ト轉シ、中古日田
 ノ文字ヲ記シ、今ニナルマデ、替ラザリシト思ハ
 ヲ、余リ間違ハアリマスマイ

地理

位置

四境連山

夜明ノ節途

湖ノ奇説

地理ハ別ニ學科アルヲ以テ、茲ニハ唯地理ガ、歴史ニ關係アルヲノ大略ヲ記サン

我日田ハ豊後ノ西北ノ端ニアル一郡ニシテ、東西五里、南北凡十余里アリ、多ノ山ガ四方ヲ取廻セル故、境ヲ出ツルニハ必ズ峻シキ山坂ヲ越チバナリマセヌ、唯西ノ方ノミ一ツノ狭キ夜明ノ谷アリテ、僅ニ兩筑ニ通ハレマス、左レハ河流ハ悉ク此ノ節途ヨリ出デ、郡内ノ水ハ一滴モ他ヘ逃クルコトハ出来マセヌ、俗ニ日田ハ昔湖デアツタト云フ説モ、奇ヲ好ム人情ニハ最デアリマス、誠ニ金城鉄壁トモ謂フベキ土地ニテ、此ノ天然ノ要害ハ、諸子ノ祖先ヲ庇ケテ安心サセタユト

利益ト損害

戰國割據

險阻ノ効

ガ澤山アリシ代リニ、諸子ヤ、諸子ノ父祖ヤ、先輩ノ利益ヲ伸サセヌコトモ、亦多クアリマス

昔戰國ノ世、多クノ豪傑ガ四方ニ起テ各邦土ヲ争ヒシ時ニ、我ガ日田ハ強國ノ間ニ挾リ、龍造寺毛利二氏ノ大友氏ト戦争アルトキハ、何時ニテモ其ノ戰場トナリマスカラ、若シ此ノ天然ノ要害ガナカリシナラバ、アキラニ就キ此方ヲニ從ヒ、結局、双方ヨリ踏潰サレテ、郡民ハ餘類ナキ様ニナリシナラン、彼ノ秋月藩ノ如キハ其ノ領知ハ我ヨリ何倍ト云フ程、大ナリシガアキラニツキ此方ニツキ、大ニ難義ヲシマシタニ、唯此日田ハ彈丸ノ如キ小キ地ニ居テ、始終動キ變ラズ、大

商業時節

險阻ノ害

山岳ノ利益

ニ郡民ノ幸ヲ得タノモ、矢張此ノ險阻ナル要害ノ爲デアリマス
 然ルニ一旦戰ガ息ンデ、人々産業ヲ働キ、朝ニハ茶、苧ヲ中津ニ運ヒ、夕ニハ絹、油ヲ博多ヨリ取寄セテバナヲヌ様ニナツテハ、曾テ敵ノ侵入ヲ防ギシ要害ハ、交通ノ邪魔トナリ、昔ノ金城モ今ハ開化ノ妨ヲナシテ、之ガ爲メニ郡人ノ利益ヲ得サルコトモ、決シテ小クアリマセヌ
 乍併、諸子ヨ決シテ失望スル勿レ、見ヨ木材炭等、毎年ノ大凡拾三萬圓余ノ収入アルハ、皆ナ多クノ山ノ御蔭ニアラズヤ、左レバ之ガ利用ヲ謀リ、本郡ヲ富盛ニナスノハ、諸子ノ役目デアアル

余ハ今茲ニ地理ヲ談ズル代リニ、諸子ノ記憶シ易キ如ク、歌ニシテ示サシ

日田郡誌ノ歌

位置

境界

形状幅員

大分縣下、日田郡ハ 豊後ノ國ノ西ノ端
 東ハ一面、玖珠コヤリ 南ハ肥後ノ阿蘇山鹿
 菊地ノ郡にも、界して 西ハ福岡縣下なる
 生葉、上妻、上座郡 北ハ豊前ノ田川郡
 並ニ下毛に連りて 山岳四周に簇立し
 大分縣ノ別世界 東西四里に南北ハ
 十里に餘る卷荷葉 面積五十方里あり
 昔ハ五郷に三つの庄 地勢ハ八原七節道

町村數

戶數

人口

生業

豆隈

津江郷

蓋シ津江ハ除くとぞ 今ハ二町、拾八村
 大字五十と二にて 人家は壹万四百軒
 人口六万三百餘 人民大抵農なまど
 製紙、製茶や、工樵を 雜職するもの、亦多し
 商家ハ豆隈地方のみ 左れど一般富饒の度は
 他郡に比して勝りける 郡の中央、豆隈は
 田園開けて人多く 豆田と郡衙、警察所
 學校、電信、裁判所 其外議事堂、常舞臺
 隈には銀行、商社あり 舟楫の便さへ、加りて
 商賣盛の一都會 郡の南方、津江郷は
 山岳起伏の其内に 人家點々散在し
 平地水田、少きも 山に良材畑に茶

言語風俗

山嶽

湯泉場

川流

農暇に樵を營むも 樵暇に工を勵むあり
 言語風俗自、ら 那内地方に異りて
 別に一部の天地あり 山の高ハ西境の
 權現、釋迦に地藏嶽 西南隅に、三國山
 西北隅に、長野山 東北隅に、龜石山
 津江の境の、渡神山 玖珠の界の、月出山
 五馬ハ山容、臥馬に似て 湯山の郷南、天ヶ瀬は
 疥癬治療の温泉場 川の大きは三隈川
 源は遠き、直入郡 九重の山より流れ出て
 玖珠を貫く道々に 拾余の小川を拾ひ來て
 三芳の村の小淵にて 大山川み出て遇ひ忍
 大山川は其の源を 湧蓋ふ發して小國より

日ノ隈月ノ

來りしものと、津江郷の
兩河相呑むの、其の様は
吐泡飛沫、雪に似て
奔端激浪、轟然と
蜿蜒日田の平原を
大肥の水に、背を清め
腹に宿れる日田鮎を
海内無比の譽あり
烟草に椎茸、楳に紙
三隈の中の洲、中島は
水流分岐の尖頭に
詩客を招く、日隈山

諸水を合せし流れなり
水勢互に衝突し
水烟河氣、雲を生し
四方の山まで、鳴り響き
横に過ぎりて、花月や
末は蕩々、筑後川
誰も知るらん、昔より
小鹿田の陶器、津江の材
孰れも、郡の特有産
五岳愛顧の梅多し
森林一丘、鬱蒼と
豆田の北ぬる、田畑中

日田鮎
陶器材木

隈星ノ隈慈

代官城趾の、月の隈

友田の西なる、星の隈

眼山

豆田の東邊、慈眼山

孰れも、壯快絶美の地

大原八幡

宮に名高き、大原は

貞觀元年の創より

座位屢々變りしが

今は三芳の、田嶋にて

山鉾

社地は高燥清雅なり

豆隈祇園の祭日は

稻荷

山鉾賑ひ奇觀なり

萩尾の稻荷は、験多く

春秋二期の祭日に

詣ての人は、山を爲す

岳林寺

鱒の頭も信心から

代官墳墓の岳林寺

後醍醐帝の勅願

明極禪師の開基にて

寺院

古跡存する、精舎あり

其他、廣圓、西光寺

大超、長福、照蓮寺

猶又津江の、傳來寺

孰れも、浄土真宗派

佛教普く他教なし

天領

九州探題

治外法權

抑も日田は古の幕府の直轄領地にて
 世々の代官府尹等は 隠然九州探題と
 威權外藩を壓倒し 所謂治外法權を
 傲然慣用せしといや 左れば鳴津細川や
 有馬黒田の大候も 深く懼れて節會年賀
 其外不時の音問も 必迄怠りなかりしと
 斯る故にや、人民は 一般倜儻不屈にて
 其上山川秀麗の 靈氣自然に感發し
 昔の淡窓、今の岳 手跡泰斗の、長三洲
 素封學者の、夕田や 旭莊、青村、林外等
 鴻儒大家の名も高く 文人傑士は頻々と
 三隈の流れの如くにて 何時を限りと極みなし

日田風

日田文學

實業世界

學生ノ責任

内部整頓

左はさりながら學童よ 油斷のならぬ、今の世は
 無我純素の文人や 風流墨客のみにては
 國の富強は望まじむ 實學、實業、勵まざる
 商權金權最と弱く 山間僻郷、自らら
 文化に後るゝ患あり 斯る時代に遭遇し
 食に餘らぬ此の米と 交通不便の此の里に
 生れし御身等の責任ハ 最も容易の業ならぬ
 左れば能く能く心掛け 祖先の不屈の精神と
 昔の日田風失ハば 商估の繁昌ハ難くとも
 進取の氣象を勵して 殖産興業、怠らば
 山林田野の産物に 心を込めて培養し
 内部の供給、富み足らし 父母の御心、安して

外部光彩

兄弟朋友、睦じく 郷里の協同堅め置き
 斯くて外部の光彩ハ 遺傳自然の文才を
 益々琢磨發揚し 三隈の流きにかたどりて
 澄める心と清き名を 津江の良材、諸共に
 海外までも、輪ち出し 那の譽を輝かせ
 那の譽を輝かせ
 之ヲ要スルニ、本郡ハ土地幽靜ニシテ、山水清麗、
 風光明媚、所謂嶺岳四陲ニ連リ、溪湖ハ域ニ湛へ、
 造化ノ神秀ヲ鍾メ、神仙ノ遊ブベキ地ナリ、氣候
 温和、物産豐饒、風俗敦厚ニシテ且剛壯、實ニ九州
 ノ一樂園ト謂フベシ

仙境樂園

太古穴居時代

太古ノ住所

太古ハ野田開ケズ、人民至テ少キ故、今ノ襟ニ何
 處デモ、人が住ンテ居タト云フ譯デハナク、唯氣
 候ノ暖ニシテ、食物ノ手ニ入り易キ海濱ヤ、江湖
 ノ邊等、總テ生活ノナシヨキ土地ニ、少許ノ人民
 ガ居リマシタ

太古ノ風俗

抑モ始メテ、此ノ陸地ニ出來タ原人ハ、今ノ吾々
 ノ如ク、幸ナル、父子ノ親ヤ、夫婦ノ情モナク、饑ユ
 レバ食ヲ求メ、飽ケバ眠リ、居ルニキマリタル場
 所モナク、林禽野獸ト別段變リハアリマセナン
 ダ
 扱テ此ノ原人ハ、當初ヨリ此地ニアリシカ、ドナ

熊襲土蜘蛛

熊襲ノ國

デアアルカト云フヲ、調ベテ見マスレバ、古熊襲ト、土蜘蛛ト云フニ民族ガ、此ノ九州ニアツタコトハ間違ハアリマセン、其内デ熊襲ハ大隅カラ薩摩ニ居テ早クヨリ三韓、漢土ト交通シ、大分開ケテナリマシタ

土蜘蛛ノ國
兩族喧嘩

土蜘蛛ハ兩筑、二豐ノ間ニ散在シ、此ノ二族ガ、次第ニ繁殖スルニ從テ、遂ニ雙方ノ喧嘩ガ起リマシタニ、北部ナル、土蜘蛛ハ氣候モ不適智識モ大分後レテナリマシタ故、熊襲ノ爲ニ抑ヘ付ラレ、漸次ニ山地ニ退キヨリモシタ、熊襲ハ夫ヨリ彌々盛ニナツテ七百年代景行仲東兩朝ノ頃ハ、殊ニ我儘ナシテ、帝室ノ大ナル世話物デアリマ

土蜘蛛ノ隱
退
熊襲ノ我儘

吾等ノ祖先

住民年代

岩穴

シテ、見ルト吾等ガ祖先ハ、此ノ不幸ナル土蜘蛛ニシテ、此等ノ原人ハ山地ヲ喜ハサル故、最初ヨリ茲ニ住ンデ居タノデハナク、繁殖ノ際、次第ニ移住セシモノガ、喧嘩ノ時分自然ニ引込シモノカニ相違アリマセヌ、而シテ此ノ土地ニ住民ノ出來タノハ、今ヨリ二千年前デアルト考ヘラレマス
諸子ガ休憩時間ニ這入テ遊ブ、校庭ノ岩穴ヲ見ヨ、彼ノ岩穴ハ如何ナル必要アツテ、如何ナル人ガ、穿ギシモノナルカヲ知レルカ、彼ノ如キ穴ハ此ノ土ニノミアルニアラズ、世界至ル所殆トナ

火風火雨

キハナシ
 俗ニ此ノ穴ハ昔火ノ風火ノ雨ノ降タルトキ、人間ノ匿^カレテ居タ所ト云フケレド、火ノ風火ノ雨ノ降ル道理ハアラレヌ、尤モ古推古天皇ノ朝ニ、大雨ガアツテ、人間ノ生存ガ覺束ナイヨウニアツタト云フカラ、大方大ノ字ト火ノ字ヲ取替ヘテ、後ニ馬鹿ヲ謂始^ヒメタノデアリマシヨウ
 全体此ノ岩穴ハ、昔未ダ家ヲ立ツルコトヲ知ラヌ、土民ノ住デ居タノニ違^ヒハアリマセヌ、是ガ則チ穴居時代デアリマス、而シテ其ノ構造、入口ハ皆圓クシテ、高四尺巾二尺、内ハ次第ニ高ク、大人モ頭ニ支^カユルコトナク、大抵濕氣少キ火成石質ノ丘

穴居時代

穴居組合

久津媛

酋長

腹ニアリテ河湖ヲ控^ホヘ、漁樵ニ便利善キ所ニ多ク、常ニ南向キカ、東向キカ、日光ノ能ク當ル如ク穿^スデアリマス
 右ノ如キ岩穴ガ一所ニ何十ト云フ程アルノハ、此時、最早今ノ村々ノ如ク、相共ニ食餌ヲ求メ、相共ニ敵ヲ防ク等ノ組合ガアツタデアリマシヨ、尤モ是レハ各々相談ヲシテ組合ヲ作タノデハアリマスマイケレド、其ノ中デ智惠ヤ腕力ノ勝レタモノガアツテ他ノ者ヲ結合シテ己ノ部下ニ從セタルニ相違ハアリマセヌ、是レハ優勝劣敗ト云テ、自然サウ成行ベキ道理デアリマス、此ノ時分日田中ニテハ、豆田ノ谷ノ久津媛、五馬ノ

五馬媛

山ノ五馬媛ガ、中々勢ノ強カリシ、酋長テアリマシタ

太古ノ世態

吾々ガ若シ此ノ時ニアリシナラバ、色々ノ面白キ事ヲ見ルデアリマシユウ、山野ニハ樹木茂リ、巨獸、長蛇群ヲナシ、時ニ出テ、人ヲ害スルヲモアリ、旅ヲスルトテモ、宿ルベキ宿モナク、狐ヤ狸ノケ廻ル、徑ナラデハ、行ベキ道ナク、屍ハ野原ニ打捨テタル儘ニテ、鳶ヤ鳥ガ喙ヒタリ、虫ヤ獸ガ喰ツタリ、皮肉ハ腐レ爛レテ、見ルニ見ラレヌ有様デアリマシタロ、又人ニハ面ニモ手ニモ毛ガ生ヘテ、岩ノ上ニ座タリ、草鷄ノ上ニ偃臥シテ居ルノモアリ、其ノ中デ獸ノ皮ヲ布タル酋

太古民格

石劍木椎

亞非利加内地ノ現状

上下ノ區別

長モアリ、林間ニ集テハ、菓實ヲ拾ヒ、茸ヲ採リ、川畔ニ下リテハ、魚ヲ捕ヘ、木ノ葉ニ食ヲ盛テ食ヒ、木弓竹矢ヲ携ヘ、石ノ劔ヤ銅ノ刀ヲ帶ヒ、木椎ヲ以テ、鳥獸ヲ獵リ、又ハ喧嘩ヲナシテナリマシタロ、此レハ決シテスラ言テハナイ、唯今テモ亞非利加ニ入テ見レバ、此ノ通りデアリマス、サレバ何ソナ文明國テモ、一度ハ必ズ此ノ通りニアツタニ違ハアリマセヌ抑モ此ノ時分ハ岩穴ニ住ンデナルモノハ、先ヅヨキ人ノ中デ、賤キモノハ土穴ニ居ルヲガ多クアリマス、夫ヨリ漸次ニ進ンテ地ヲ深ク掘テ木ヲ突建テ、島ヲ以テ、小キ柱梁等ヲ締リ付ケ其ノ

堀立小屋

奥城

朽骨

酋長ノ職掌

權シキ

上ニ草ヲフキテ、今ノ堀立小屋ノ如キモノヲ作
 テ、住ム様ニナリマシタ
 又此頃、人ノ死スルトキハ、土器ニ入レテ、穴ノ奥
 ニ、土ヲ掩ヒテ置キマシタ、是レガ墓ノ始テアリ
 マス、文政ノ頃ニ月限山ノ道ヲ作ル爲メ穴ヲ毀
 ナタルニ、朽骨ノ入タル土器ノ出タリガアリマ
 ス
 此ノ時代ノ酋長ト云フハ、他所ト喧嘩ノトキハ
 大將ニナリ、部下ノ喧嘩ノトキハ裁判官ニナリ、
 其他町村長ノ如ク一切ノ世話ヲ爲シテ、随分權
 シキガ強クアリマシタ

上古國造時代

皇威ノ及ブ
 所

獨立國ノ姿
 景行天皇御
 巡幸

神武天皇日向ヨリ起テ、中國ヲ平ゲ給ヒシヨリ
 後、數代種々ノ役人ヲ置キテ、國家ヲ治メシト雖
 モ、當時皇威ノヨク行ハル、所ハ、只近畿ノミニ
 シテ、遠キ地方ハ王臣ノ名ハアレドモ、一々王命
 ヲ受クルモノハナク、只時ニ少々ノ貢物ヲ獻ス
 ル位ニテ、矢張一ツノ獨立國テアリマシタ、殊ニ
 熊襲ノ如キハ、土地ガ片寄ツテ、皇都ニ遠キヲ以
 テ、大ニ我儘ヲシマシタ故、景行天皇様ノ時ニ至
 リ、御自身カヲ御征伐ニ御降ニナリマシタ、此時
 我ガ日田ハ、猶酋長ガ勝手ニ政治ヲシテ、皇澤ニ

久津媛出迎

露ハヌ故、天皇ニハ生葉ノ行官ヨリ、此ノ地ニ御幸ニナリシカバ、土神(神ト云フハ昔、人ヲ尊シテ云フ詞ニテ、祠ノ中ニアル神トハナガヒマス)久津媛、石井ノ鏡坂マテ出テ迎ヘテ、之ヲ佐ケ奉レリ

ソコテ岩穴等ニ住ンテ居ツタ、化物ノユウナ土民等ハ、大ニ恐レテ語り合フニハ、彼ノ劔ノ光ノ恐シサ、聞クニ鬼神ヨリモ強カリシ熊襲サヘ、打滅サレタリト、況シテ吾等ノ頼トスル、久津媛モ降り給ヘリ、吾々モ急キ貢ヲ捧ケテ、命ニ從フベシトテ、相共ニ降伏シマシタ

景行天皇御歸幸ノ後、日本武尊再ヒ御降アツテ、

土民降伏

成務朝制度

熊襲ヲ夷ゲ、成務帝之ヲ嗣テ、大ニ政度ヲ定メ、國造、縣主、稻置等ノ役ヲ置キ、國々ヲ治メ、天下ガ大ニ安ラカニナリマシタ

日田國

止波足尼 農業ノ始

此時日田ハ、小國ト定メラレ、止波足尼ト云フ人カ、國造トナリテ、都ヨリ來リ、今ノ田嶋ニ居リ、久津媛等ヲ用ヒテ稻置トナシ、常ニ親シク、人民ニ農業ノヲテ教ヘ、田地ヲ闢キ等シテ、大ニ風俗ヲ改良シマシタ、故ニ卒シテ後、人民ハ其德ヲ慕ヒ、社ヲ立テ之ヲ祀リマシタ、今ノ石井神社ガ是テアリマス、其ノ後久シク續キマシタガ、大化ノ新政ノ時分ニ、日田國ハ廢セラレ、國造モ止メラレテ、豊後ノ國ニ合セラレマシタ

石井神社

廢國

日下部氏

治外ノ名族

以上國造ノ時代、日田ニハ日下部ト云フ名家ガ
 アツテ、欽明天皇ノ朝ニハ、日下部ノ祖、村ノ阿自ナ
 ルモノ、勅負部トテ、禁裡守護ノ尊イ役ニ出テタ
 ルヲアリ、其ノ子孫ハ此ノ土地ニ於テ、少許ノ知
 行ヲ持テ、國造ノ政治ノ外ニ居リマシタ、是等ノ
 一カラ推シテ見ルト、此ノ日下部氏ハ元皇族テ
 アツタヨウニ考ラレマス、俗ニ草壁春里ト云フ
 長者ハ、此ノ子孫ナランカ

封建制度ノ弊

上古ノ國造ハ、世襲ノ役ニシテ、徳川時代ノ殿様
 ノ如ク、所謂封建ノ制度デアリマシタカラ、其ノ

中古王朝時代

大化ノ改正

全國區畫

國司 郡司

内ニハダシク勢ガ強クナツテ、王命ニ抗シ、或
 ハ弱キ國ヲ攻取ル等、自分勝手ノ苛キ政治ヲ行
 ヒ、人民ヲ苦メル不都合ガ多クアリマシタ故、孝
 徳天皇大化元年八月大令ヲ下シテ、大ニ改革ヲ
 行ヒ、我儘ナル役人ヲ追拂イ、國造、稻置ノ私ニ持
 テ居タ、田地ヲ取上ケ、悉ク人民ニ分テ與ヘ、全國
 ナ六十余國、六百余郡、一萬三千余郷ニ分テ、一郷
 ナ五十戸ト定メ、郷ニハ郷長、郡ニ郡司、國ニハ國
 司ヲ置キ、國司ハ朝臣ヲ派遣シ、四年交替ノ年限
 官トナシ、郡司郷長ハ、元ノ國造ヤ、稻置ノヨキモ
 ノニ命シマシタ、此ノ際我日田ハ郡トナリテ、豊
 後ノ國ニ隸ケラレ、郡内ヲ五郷ニ分テ、大領、小領、

俸給

主帳ノ三職アリテ、郡内政治ヲ行ヘリ
而シテ其俸給ハ、職分田トテ、在職ノ間、大領ハ田
六町、小領ハ四町、主帳ニハ二町ヲ給セリ

驛ノ事

又公事ヲ以テ往來スル時、便利ノ爲メ、三十里(三
里余)毎ニ、一驛ヲ置キ、驛戸内ノ富豪ニシテ、事理
ニ明ナルモノヲ驛長トナシ、驛子數人、驛馬五匹
ヲ置ク、其ノ費用ニハ驛田二町アリ、且ツ驛長、驛
子ハ、不課ノ民デアリマシタ、此ノ時、石井ハ驛舍
ノアリシ所ナリ

石井驛

尙此ノ時代ノ税法、民族ノ區別等ハ長々シケレ
バ、口投トナス可シ
右ノ如ク大化ノ改正アリシガ、此ノ時我ガ日田

石井氏

ノ郡領ハ何人ナルヤト尋ヌルニ、能ク明ナラザ
レドモ、此ノ以前ヨリ石井氏ナルモノアリ、改正
後モ、久敷本郡ノ政治ナセシニ相違ナシ、而シテ
此ノ石井氏ハ、本郡開闢ノ功アリシ、止波足尾ノ
子孫ナルベシ

中井王ノ我儘

カクテ數代ヲ經テ、豊後ノ國司ニ中井王ナルモ
ノアリ、莊園トテ自分ノ内訶ノ土地ヲ多ク持テ、
我ガ日田ニ私宅ヲ置キ、任滿ツルモ歸ラズ、猶勝
手ニ振舞ヒテ、國司郡領モ制シ兼、大宰府ノ兵來
リテ之ヲ捕ユルニ至ル、是ヨリ後ハ、大化ノ新政
モ稍々弛ビ、國司ハ自分ノ利益ニナルコトノミナ
ナシ、地方ノ豪族ハ、郡領等ノ命ニ從ハズ、大ニ我

豪族ノ我儘

年貢減少

王命不行

莊園

流民莊園ニ
集ル

儘ナシ、朝庭ニ納ムル年貢ハ、年々減シテ、國用
 足ラザル故、屢々令ナ下シテ、之ヲ制シタレドモ、
 此ノ時ハ藤原氏、天下ノ政治ヲ勝手ニシ、續テ武
 門ノ起ラントスル時節故、容易ニ命ヲ奉ズルモ
 ノナク、遂ニ豪族ガ郡領等ヲ押退ケテ、勝手ニ政
 治ナスル様ニナリマシタ
 全体莊園トハ、所有主ノ勝手ニシテ、朝庭ニ租稅
 ナ納メズ、作者ニハ課役雜役ナク、政令簡易ニシ
 テ、郡郷ノ民ヨリモ、幸福ヲ受クルコト多ケレバ、流
 民等ハ悉ク之レニ集マリ、所有主ノ家人ノ如ク
 ナリシ故、莊園ヲ多ク有テル豪族ノ勢強カリシ
 ハ、最モノ次第デアリマス

日田歴史 二

豪族時代

大藏氏郡職
ヲ奪フ

石井源太夫

王政漸ク衰ルニ當テ、我が日田ニハ、大藏氏ナル
 豪族アリシガ、鬼藏ノ大夫永弘ナルモノニ至テ、
 累代ノ富強ヲ賴ミ、郡政ヲ奪ハント欲スレドモ、郡
 領石井氏ハ、久シキ名族ニシテ、容易ニ之レヲ動
 スコ能ハザルヲ以テ、種々ノ不思議ヲ現シ、神託
 ナリ等、稱シテ、遂ニ郡領石井源太夫ヲ退ケテ、石
 井大明神ノ神主トナシ、自ラ代テ郡領トナレリ、

永弘ノ智謀

實ニ文徳天皇仁壽二年ナリ
然レモ人民全ク氣服セザルヲ恐レ、大ニ智謀ヲ
廻シ、第一ニハ八幡大神ヲ出現セシメ、或ハ自分
ノ祖先ハ神孫ナリトテ鋒ヲ地中ヨリ掘出等シ
テ、遂ニ愚蒙ノ人民ヲ欺キ果セリ
或ハ大藏永弘ハ、中井王ノ子ナリト云フ説モア
リ、勢強キ豪族タルヨリ考ユレバ或ハ然ラソ、兎
ニ角、永弘ハ一代ノ豪傑ニシテ、智謀ヲ以テ郡内
ヲ讓リ受ケ、大藏氏數百年ノ基ヲ始メタル人ナ
リ
大藏氏ノ居城ハ、今ノ上手戸山ノ宅ナリシガ、後
城内ニ移レリ

居城

一代ノ豪傑

八幡大神ノ御出現

大藏永弘ノ郡司トナリシ後清和天皇ノ御世、貞
觀元年八幡大神、此ノ地ニ鎮座マシマスニ付キ、
奇瑞ノアルヲ驗トシテ、御祠ヲ立ツベキ由、御説
宜アリテ、間モナク、大原山ノ杉ノ梢ニ、白幣出現
シケレハ、村民等、奇異ノ思ヲナシ、ヤガテ奏聞ヲ
經、勅命ニヨリテ神社ヲ作り、宇佐八幡ノ大官司
ノ一族、公則ナルモノヲ乞ヒテ、之ヲ祀ル、公則遂
ニ此ノ地ニ住シ、其ノ裔永ク大原神宮ニ奉仕ス、
今ノ神主、宮大夫橋本氏是ナリ
此ノ大原山ト云フハ、求來里村ニアリテ、宮モ古
ハ此所ニアリシガ、創立ヨリ七百五十余年ヲ經
テ元和十年石川主殿ノ領主タルニ及ヒ、今ノ田

杉梢ノ白幣

宇佐公則

神主橋本氏

元ノ大原

今ノ大原

祭日

島ニ遷シ祀レリ、其ノ祭日ハ、古ヨリ八月十四十
五日ニシテ、放生ヲ執行シ、神輿御幸アリ

日田氏

其ノ後大藏氏續テ郡司ヲ務メ、永弘ノ後(數世ナ
ラシ)天喜年中鬼監大夫永興ニ至リ、始メテ日田
氏ト稱ス、永興英明ニシテ善政アリ、卒シテ諸人
之ヲ祀ル、今城内ノ永興寺是ナリ

永興寺

永季ノ大力
相撲ノ譽

永興ノ子カ、或ハ孫カニ、鬼大夫永季ト云フモノ
アリ、力量衆ニ勝レ、延久三年年十六才ニシテ、相
撲ノ節會ニ徵サレ、出雲ノ小冠者ナル大力士ニ
勝ナケレバ、朝廷之ヲ賞シテ其ノ欲スル所ヲ與
ヘント云フ、永季請テ曰ク、今日ノ勝ハ、臣ガ平常信
仰スル所ノ大原八幡ノ神祐ナレバ、方今第一ノ

江師ノ額

碩學タル大江匡房卿ノ扁額ヲ得テ、之ヲ獻ゼン
ト、天皇之ヲ嘉シ、江師ニ勅シテ、額ヲ賜フ今ノ
鳥居ニアル、大波羅野御屋新呂ノ額是ナリ
其後、數々角力ニ徵サレ、一度モ負ケシトナク、長
治元年鶴河内村簿ニテ卒ス、世人相撲神ト崇メ
祀リ、日田殿ト稱ス古ハ官殿モ莊麗ナリシガ、今
ハ只跡形ノミ殘レリ

相撲神

大藏氏繼嗣之亂

保元以後
武臣ノ我儘

保元ノ亂後、王威全ク行レズ、武臣朝政ヲ專ニシ
國々ニモ、亦種々ノ内亂アリ、郡司ノ善良ナル土
地ハ、人民安ヲカナレドモ、暴惡ノ人、出ツルトキ

重税酷刑

世嗣騒動

季盛ト季平

高家ト永平

ハ、重税ヲ課シ、酷刑ヲ行ヒテ、上ヲ憚ラズ、人民ノ苦ハ、實ニ言語ニ斷ヘタル有様ナリ、此ノ時ニ當リ、我が日田ノ人民ハ至極安カナリシ様ナレドモ、郡司大藏氏ニハ、世嗣ノ一ニ付キテ、大騒動ヲナセリ

今其ノ起因ヲ尋ヌルニ、初メ永季四子アリ長子宗季、郡司トナリ、卒シテ後、其ノ子季盛ハ適嗣トナルベキ、圖書ナシトテ、宗季ノ弟、季平繼キテ郡司トナリ、季年ハ又弟永平ヲ養フテ嗣トナス、然ルニ季平後ニ男ヲ生ミ、高家ト名ク、季平死シテ、永平ト高家ト、互ニ世嗣ヲ争ヒシガ、永平ノ勢強ク、郡民ノ望モ多ケレバ、止ヲ得ズ、郡司ノ職ヲ讓

永平女婿ニ殺サル

夜又王

乳母ノ働

外戚緒方氏

逆臣伏誅

乳母ノ禮

リタレドモ、高家ノ無念猶止ガタク、保元二年十月、永平ノ女婿三牟田盛季ナル者ヲ誘ヒテ、永季ヲ刺サシメ、其ノ從属ヲ求メテ、悉ク之ヲ殺ス、永平ノ子ヲ夜又王ト云フ、時ニ年十一、乳母某之ヲ携ヘテ、山野ヲ奔ル、追フモノ至レバ、乳母悉ク之ヲ殺シ、遂ニ脱シテ母ノ兄ナル、緒方惟榮ニ至ル、惟榮怒テ、將ニ兵ヲ發シ日田ニ向ハントス、時ニ日田ノ群臣逆徒ヲ殺シテ、高瀬井坂ノ二人ヲシテ夜又王ヲ迎ヘシメ、立テ郡司トナシ名ヲ永宗ト改ム

永宗既ニ郡司トナリ、乳母ノ舊勞ヲ懷ヒ、母子ノ禮ヲ以テ、之レニ仕ヘント云ヒシモ、乳母聽カズ、

仍ホ賤役ヲ執ルヲ舊ノ如シト、噫此ノ乳母ハ誠ニ歎賞スベキ、忠義ノ婦人ナリ、惜イカナ其名傳ハラサルヲ

平家追逐

平氏ノ威勢 平治ノ亂後、都ニテハ、平氏大ニ威勢ヲ張り、國政ヲ勝手ニ取扱ヒ、無法ノ振舞多カリシカ、治承年中源ノ頼朝起ルニ及ビ、所在ノ源氏一時ニ旗ヲ擧ゲ、九州ノ如キハ、平氏ノ知行多カリシモ、平軍ノ屢々敗ル、ヲ見テ、叛キ去ラントスル有様故、平氏ノ名將平貞能下リ來リテ、之ヲ鎮制シケレバ、菊地原田等ノ大族悉ク降伏セリ

大藏緒方平氏ヲ拒ム

時ニ我日田ハ、永宗ノ子永秀、郡司タリシガ、原田種直來リテ、平家ニ味方スベキ由、説キケルモ、永季ハ其ノ親戚タル緒方氏ト心ヲ同クシテ、之ニ從ハザリシカバ、種直怒リ兵ヲ卒ヒテ、來リ攻ム、永秀、櫛崎ノ城ニ據テ、之ヲ防ク、敵遂ニ下ス能ハズ、此時貞能ハ、上國ノ戰爭ニ、平氏危シト聞キ、急ニ都ニ上リシガ、間モナク平氏ノ一門、安徳天皇ヲ奉ジテ、筑前大宰府ニ降リ來リ、再ヒ使ヲ以テ、降參スベキ由、申越ケルモ、敢テ之ニ從ハズ、緒方日杵ノ二氏ト共ニ平家ヲ攻メテ走ラセシカバ、戰功ニ依テ、頼朝公ヨリ生葉ノ庄ヲ増シ給リ、永少日田ノ地頭タルベキコトヲ許サレタリ

櫛崎ノ戰

平氏西下

平氏追逐

増封

永隆生捕ラ

限上ノ庄

此ノ戦争ニ、永秀ノ弟永隆、三笠ニテ平家ノ爲ニ生捕ラレ、久シク船中ニ在テ苦ミシガ、平家亡ブル時、免レテ鎌倉ニ召出サレ、筑前限上ノ庄ヲ賜ハル

元寇之役

北條時代

蒙古ノ來寇

永基戰死

平氏亡ビテ、源氏天下ノ政權ヲ執リ、源氏ノ嗣絶ヘテ、北條氏國政ヲ握リ、國內一時靜ナリシニ、龜山天皇文永十一年、蒙古ノ兵來寇シ、九州ニテハ大騷動ヲサセリ、此時我日田ノ郡司ハ永秀ノ曾孫、彌次郎永基ト云フモノナリシカ、筑前早良郡ニテ、虜兵ヲ奮撃シ、大ニ武勇ヲ現シテ、遂ニ戰死

元兵大舉

八角田ノ戰

三奈木ノ庄

元僧明極

岳林寺

南北朝

セリ、後其ノ賞トシテ、筑前安岐郡ヲ大藏氏ニ加増セツル

其後間モナリ、宇多天皇弘安四年、元兵大舉來リ犯ス、此ノ時永基ノ子(弟カ)永資出陣シテ、虜ト筑前八角田ニ戰フテ、大ニ功アリ、亂平グノ後、賞トシテ筑前三奈木ノ庄ヲ拜領ス
永資ノ子永貞郡司タリシ時、元ノ僧明極ナルモノ來朝シテ、諸國ヲ巡歴シ、我が日田ノ景勝ヲ愛シ、時ノ御帝、後醍醐天皇ノ勅願ヲ得テ、友田村ニ大伽藍ヲ建立シ、招陽山岳林永昌禪寺ト稱ス、今猶古跡有スル大寺ナリ

永貞ヨリ數世ノ間ハ、南北朝合戰ノ時ニシテ、我

日田ハ大抵足利氏ニ屬シ、郡内ハ却テ平穩ナリ

叔姪之爭

永秀ト永好

永貞ヨリ五世、永秀ニ至リ（永秀庶出ナル故カ）弟

永好ト永包

永好嫡嗣ヲ爭フ、數年後、永好遂ニ國ヲ去ル、カ

疫神

クテ永秀死シ、子永包繼グニ及ヒ、永好日頃ノ本

八郎社

意ヲ達セシト欲シ、都ニ登リ乞フ所アラントシ

左馬丞ノ仇

ケルニ、永包ノ郎等之ヲ追フテ、途ニ殺害セリ、俗

討

ニ云フ、永好怨ヲ抱テ死ス、故ニ其ノ靈、疫神トナ

八郎社

リ日田郡ヲ腦スト、依テ天神ト崇メ祀ル、今ノ八

郎社是ナリ

其後永好ノ臣、今村左馬之丞兵ヲ起シ、永包ヲ襲

討

其後永好ノ臣、今村左馬之丞兵ヲ起シ、永包ヲ襲

大藏氏斷絶

フテ之ヲ殺シ、其身モ又討死セリ、永包此時十二才嗣ナシ、是ニ於テ大藏氏斷絶ス、大藏氏ハ元祖鬼藏大夫永弘ヨリ、永包マテ、二十一代五百六十余年ナリ

日田大友家並ニ其滅亡

日田大友家

永包ノ七ブルヤ、其ノ姉^子大友親滿ナルモノ、日田郡司トナリ、名ヲ永世ト改メ、大藏氏ヲ祀ル、依テ日田大友家ト云フ、是ヨリ大友氏數世郡司タリシガ、其ノ間殺弑逆ニ遇フアリ、或ハ不具ナルアリテ、騷亂相繼キタリ、此ノ時ハ足利氏ノ末戰國ノ初ニテ王威武威共ニ行レズ、群雄ハ四方ニ

騷亂繼グ

倭臣平島主水

國守ニ訴フ

再訴

草本ノ幽居

起テ、戰爭止ム時ナク、人民塗炭ノ苦アリ、諸子カ
祖先ノ困難實ニ想フベキナリ、カクテ永世ヨリ
五世親將ニ至リ、性暗愚近習平島主水ナル者、郡
政ヲ勝手ニ扱ヒ、奢ヲ極メ老臣ヲ却ケレバ、群臣
相議シテ、之ヲ國司府内ノ城主大友義鑑ニ訴フ
義鑑命シテ主水ヲ退ケシム、主水之ヲ憤リ、密ニ
親將ヲ誘ヒ出シテ、諸士ヲ亡シ、邦家ヲ横領セン
一ヲ謀ル、諸士之ヲ察シテ、再ヒ豊府ニ訴フ、義鑑
大ニ怒リ、直ニ親將ヲ却ケ、主水ヲ誅セシム、諸士
依テ親將ヲ豊前草本ニ幽ス、後ニ親將ハ小野村
ニテ死シ、日田大友家亡フ

八郡老及高瀬合戦

八郡老

高瀬ノ直論

奸計

親將ノ退居スルヤ、義鑑八人ノ郡老ニ命シテ、郡
政ヲ制道セシメ、且親將ノ退居ヲ以テ足レリト
セズ、急ニ之ヲ殺害セシム、郡老等則チ相議シテ、
密ニ之ヲ害セント謀リケルナ、高瀬山城守鑑俊、
獨リ之レニ與セズ、大ニ怒テ曰ク、縱令大守ノ命
タリトモ、聊ノ過ヲ以テ、舊恩ノ主人ニ亦チ加ル
ハ、臣子タルモノ、道ニ非ストテ、其ノ居城ニ歸
リ兵備ヲナス、時ニ天正十七年十二月也、郡老是
ヲ豊府ニ訴ヘ、先ツ使チ親將ニ使シテ曰セケル
ハ、君姦臣平島ノ爲ニ誤ラレ、蟄居マシマス、我
等ノ歎キニ堪ザル所ナレバ、大主ニ乞フテ、當郡

親將欺カル

高瀬合戦

水路ヲ斷ツ

山城守奮戦シテ死ス

親將自殺ス

ノ主ト仰ガント議シケルニ、高瀬一人之ヲ拒ミシ故、大守ニ訴ヘタルニ、君ヲ大將トシテ、高瀬ヲ討取ルキ下知ニ付、速ニ御出陣下サルベシト、親將之ヲ聞キ計トハ知ラス、大ニ喜ビ、即時ニ草本ヲ發シ、小野へ出陣セリ、カクテ郡老等ハ兵ヲ合セテ、高瀬城ニ押寄セタルモ、山城守要害ニ據テ、緊ク防キ戦シ故、寄手容易ニ近付テ得ズ、大ニ攻倦ミテ居タリケルガ、遂ニ一策ヲ案シ出シ、城東ノ水路ヲ絶テ、火矢ヲ城中ニ射込ケレバ、城壘之レガ爲ニ燒ケ、鑑俊等一門奮戦シテ死ス(然レモ高瀬ハ鑑俊ノ末弟之ヲ繼キテ再ヒ起レリ)此時親將ハ小野ノ陣中ニアツテ、欺カレシ次第ヲ聞

知リケレバ、詮方ナシトテ自殺セリ

秋月合戦

戦國時代
毛利氏
島津氏
龍造寺氏
秋月氏

高瀬合戦以後、郡老等ハ豊府ノ指圖ヲ受ケテ、郡政ヲ司リ居タルカ、此ノ時ハ戦國トテ、我カ日本國ノ最モ亂レタル時代ニテ、九州ノ如キモ、毛利氏山陽ヨリ侵入シ、島津氏ハ薩摩ヨリ起テ次第ニ九州ヲ蠶食シ、肥前ノ龍造寺筑前ノ秋月二氏ハ、豊後ノ大友ト相争ヒ、戦争止ム時ナク、我日田ノ郡老ハ始終大友ニ從テ、常ニ近國ノ敵ト戦ヘリ、大永年間ヨリ秋月氏大友氏ノ命ニ背キ、近隣ヲ攻取ル故、大友義鎮日田ノ郡老ニ令シ時節ヲ

石井左馬亮
欺キ討ツ

種實憤激

武下討滅

計テ之ヲ討シム、左ル程ニ天文年中秋月種實ノ臣、石井左馬ノ亮ナルモノ、密ニ款ヲ送リテ、降参ヲ乞ヒケレハ、郡老之ト計ヲ合セ、左馬亮ヲシテ先ツ和睦ヲ勸メ、秋月ノ老臣勇士ヲ國境ニ欺キ出サシメ大勢ヲ以テ之ヲ取圍ミ不殘討取リタリ、是ヨリ種實大ニ憤激シ、島津義久ト相連和シテ愈々烈敷大友家ニ抗敵シ、我郡老トハ戰絶ユルトナク、其ノ上郡内ニ内亂起リ郡老武下某ハ秋月ニ内縁アリトテ、之ヲ討滅ス等、一刻モ安キ日ハナカリシ

高井嶽潰陥

高井城

秋月ノ大勢

高井城ヲ圍ム

堤郡老討死

落城

秋月勢亂入

豊筑通路絶ユ

秋月トノ葛藤、彌々甚ダシクナルニ及ヒ、我カ郡老ハ、高井嶽ニ城ヲ築キ、要害ヲ固メ、郡老交ル城番トナリ、敵ノ侵入スルハ、烽火ヲ舉テ相圖トセリ、頃ハ天正九年秋月大勢ヲ卒ヒテ攻寄タレバ、城兵烽火ヲ舉ケテ急ヲ告ケタレ、援兵未ダ至ラサルニ先テ、秋月勢緊シク攻立ケル故、城番堤某討死シテ、城ハ忽テ攻落サレタリ、敵ハ此ノ勢ニ乘シ、郡内ニ亂入シ、火ヲ民家ニ放テ、鼓噪シテ進ミケレバ、我郡老之ヲ石井ニ迎ヘ撃テ、非常ニ烈シク戦ヒシガ、敵遂ニ敗レテ引返ス、是ヨリ筑後豊後ノ通路暫ク絶ヘタリ、其後ニ大鶴村近所ニ於テ、屢々戦争アリシモ、墓々シキ

勝負ハアラザリシ

郡老瓦解

義鎮ノ暴政

鎮西六國ノ大守大友義鎮、無道ノ政治多カリシ

島津氏ノ勢

カバ、叛キ去ルモノ多ク、島津氏此ノ圖ニ乗シテ、

大閩秀吉

頻ニ侵入シ、義鎮ノ子義統ノ時ニ至テハ大友ノ

九州征伐

領地ハ、殆ンド島津ノ爲メニ攻取ラレタリ、此時

上國ニハ豊臣秀吉、近國ノ亂ヲ平ケテ、政權ヲ握
リ居タレバ、義統之ヲ訴ヘケルニ、天正十四年秀
吉島津征伐トシテ出陣シ、所々ニテ戦争アリシ
ガ、島津降参シテ、九州全ク治マレリ、カクテ日田
郡ハ矢張郡老政治ニテ過ギシガ、朝鮮征伐ノ時、

義統ノ卑怯

國守義統卑怯ノ振舞アリテ、大閩ノ怒ニ觸レ、領

郡老瓦解

地悉ク沒收セラレ、我日田及玖珠ハ大閩ノ直轄

領地トナリタレバ、郡老等ハ其ノ職ヲ退ケラレ
テ、悉ク解散セリ

津江ノ長谷部家

此ヨリ以前津江ニハ、長谷部氏ナルモノアリテ、

源三位頼政

郷内ヲ支配セリ、此ノ長谷部トハ高倉天皇ノ御

高倉宮以仁王

世、平氏ノ專横ヲ憤リ、源三位頼政ノ勸ニ從ヒテ

信連逃ゲ下

兵ヲ擧ゲ給ヒシ、高倉ノ宮以仁王ノ侍臣、長谷部
信連ナルモノ、子孫ニシテ、以仁王頼政等討死
ノ時、信連ハ逃レテ日田ニ來リ、大野村雪ケ嶽ニ

城テ之レニ居レリ

義信領司トナル

長谷部家絶ユ

建久四年其ノ子義信(或云フ義信實ハ以仁王ノ子信連ノ養フ所ト)國守大友能直ノ命ヲ受ケテ領主トナリ、夫ヨリ子孫永ク津江ヲ支配シ、二十余代信茂ニ至テ、國守義統退去ノキ、同シク領ヲ失ヒ、後信茂卒シテ嗣ナシ、祀絶ユ、是レ則チ郡老解散ト同時ニシテ、是ヨリ津江モ郡内同様ノ支配方トナル
聞ク長谷部家ハ王事ニ志アルモノナリ、南北朝ノ時、國司大友氏ハ北朝ニ從フモ、長谷部氏ハ獨リ南朝ノ正朔ヲ奉セリ、或ハ征西將軍ノ爲メニ力ヲ盡セシトモアリ、是レ石碑等ノ刻文ニ明ナ

王事ニ勉ム

傳來寺

津江ノ傳來寺ハ、郡内ノ舊寺ニシテ、梶原景季ノ築キシト云フ庭等アリ、而シテ今ノ住職長谷部氏ハ、信連ノ裔ナリトモ云ヘリ

代官宮木氏及ヒ日ノ隈城

土地丈量

郡老瓦解シテ、我ガ日田郡ハ公領トナリ、文祿二年官部某來リテ、田畑ヲ丈量シ、石高ヲ定メタリ、其ノ制畑三反ヲ以テ田一反ニ準ス、本郡惣反別千四百八十八丁、石高二万七千八百石ナリ
翌文祿三年代官宮木長次郎來リテ、地ヲ日ノ隈山ニ相シ、其ノ頂上ニ龜翁山真光寺ト云禪寺ア

宮木氏

日ノ隈城

隈町ノ起

リシヲ、今ノ隈町天満宮ノ傍ニ移シ、其ノ跡ニ城ヲ築キテ之ニ居ル、此ノ時田島村ヨリ人家ヲ移シテ、城下ニ住マシメ隈町ト号ク、今年ヲ去ルニ將ニ三百一年ナリ

領主毛利氏

代官宮木氏制務三年ニシテ職ヲ辭シ、慶長元年毛利高政日田ヲ分領スルニ及ヒ、其ノ父友重ハ中城ニアリテ、其ノ餘ノ代官タリシカ、高政朝鮮征伐ニ赴クニ當リ、友重ハ其ノ子ノ領地ヲ預リ、日ノ隈ノ城ヲ修理シ、五階ノ天守ヲ造リ、三階ノ城樓ヲ立テ、城下ニハ堀ヲ廻ラシ、三方ニ門ヲ構

城溝修理

公領私領相混ズ

關ヶ原ノ戰

へ、要害ヲ堅固ニセリ

石垣原ノ戰

栗山備後

毛利隼人

移封

慶長五年石田三成兵ヲ擧ケテ、徳川家康ト關原ニ戰フトキ、大友義統三成ニ與ミシテ、舊領ヲ復セント欲シ、密ニ兵ヲ集メケルヲ、豊前中津ノ城主、黒田如水ハ初メヨリ徳川ニ從ヒタレバ、早速ニ兵ヲ發シテ、大友氏ト石垣原ニ戰ヒ、大ニ之ヲ破リ、其ノ臣栗山備後ナルモノヲシテ、兵ヲ卒ヒテ、日田ニ入り、向背ヲ問ハシム、時ニ日ノ隈城ニハ高政ノ臣、毛利隼人郡代トシテアリシカ、高政ノ徳川氏ニ從ヒシト聞キ、栗山ヲ城山ニ招キ、郡政ヲ任セシモ、間モナク栗山ハ引退キタリ、是ヨリ以前高政ハ封ヲ佐伯ニ移サレタレドモ、猶本

郡ノ代官タルヲ以テ、隼人代テ再ヒ郡政ヲ取レ

領主小川氏月ノ隈城

小川光氏

有田郷森領
トナル

慶長六年高政ノ支配ノ内、玖珠日田一万石ヲ分
ナテ、小川光氏ヲ封ス、其時又有田郷(四千石)森領
久留島侯ノ領地トナセリ
日ノ隈城ニハ、代官役所アルヲ以テ、光氏ハ別ニ
月ノ隈ニ築キテ之ニ居ル、名ケテ丸山城ト云フ、
此時友田村ヨリ小許ノ人家ヲ移シ、城ノ南方ニ
住マシム、之ヲ丸山町ト云フ

大坂陣

丸山町

丸山城

大坂陣

留守ノ用心

元和偃武

光氏死シテ後、其ノ臣小川喜助、小川又右衛門ノ
二人、郡政ヲ司リシガ、慶長十九年豊臣秀頼徳川
氏ト相戦フキ、小川二氏ハ徳川ニ屬シ、兩人共出
陣シ、且ツ糧米ヲ運送シテ戦ヲ助ケタリ、其ノ時
留守居ノ老士等ハ用心ノ爲メ、要害ヲ堅メ、庄屋
等ヲ呼ヒ集メ、四方ノ警固ヲナセリ、亂平ギテ後、
兩主無事歸郡シ、夫ヨリ十四年間勤務セリ
大坂陣ニ豊臣氏亡テヨリ、徳川氏全ク政權ヲ執
リ、海内ノ諸侯皆命ヲ受ケ、天下清平ニ屬ス、元和
偃武是ナリ

領主石川氏附代官交替

永山城

豆田町

八幡遷宮

天領

代官交替

預り政治

小川氏ニ繼テ、元和二年石川總輔、本邦全体(有田ヲ除ク)ノ領主トナレリ、此時丸山ヲ永山城ト改メ、丸山町ヲ豆田町ト改メ、再ヒ土地丈量ヲナセリ

寛永元年五月求來里村元大原ヨリ新大原へ八幡宮ヲ遷シ祀ル、貞觀ノ御出現ヨリ既ニ七百五十二年ナリ

寛永九年總輔封ヲ下總佐倉ニ移サレテヨリ後ハ、本郡ハ續キテ天領トナリ、代官ノ治下ニアリ、而シテ此ノ代官ハ、二三年ニシテ交ルヲアリ、或ハ十數年、或ハ二代モ續クコトアリ、或ハ代官ノ間切タルキハ、近國ノ領主假ニ政治ヲナスコトアリ

肥後殿堀

代官兼務

リ、永山ノ後ナル肥後殿堀ノ如キハ、寛永中熊本ノ城主細川綱俊本郡ヲ預リシ時、堀リタルモノナリ、又本郡ノ代官ニシテ豊前筑後其他ノ天領ヲ支配スルモノアリシ、或ハ日ノ限、月ノ限、兩城同時ニ二人ノ代官アルコトモアリキ。

日田歴史 三

眞宗西派再興

石山合戦

西本山

眞宗ノ本山ト稱スルハ、戦國ノ時マデハ、大坂ノ石山ニアリシガ、織田信長ノ爲ニ攻破ラレ、門主顯如、教如、實如父子暫ク轉退シ居リタルヲ、豊臣秀吉ノ時、實如上人ヲ召出シ、地ヲ京都ニ給ヒテ、之ヲ再興セシム、後ニ西本願寺ト云フハ是ナリ、其ノ後慶長七年徳川家康僧侶ノ勢強ク制シ難キヲアソント思ヒ、其ノ權ヲ分タシメントノ政

東本山

改派令
西教寺

宗泉

紺屋町

略ヨリ、別ニ一寺ヲ建立シ、石山轉退ノ時、谷ナ一
 身ニ引受ケ、一旦勸當セラレシ、實如ノ兄、敬如ナ
 シテ之ガ門跡ヲラシム、東本願寺是ナリ
 然ルニ家康東寺ノ檀那タルヲ以テ、諸侯其ノ旨
 ニ媚ビ、毛利高政ノ領主タル頃、我ガ日田ニアル
 西寺ノ末派ヲ、東派ニ改轉セシメタリ、此時隈町
 ニ西教寺トテ、門徒九百余ヲ有スル大寺アリシ
 ガ、其ノ住職宗泉ナルモノ、轉派ヲ拒ミタレバ、領
 主怒テ門徒ヲ引上ゲ、寺院ヲ關所トナシ、宗泉ヲ
 シテ還俗セシメシ故、宗泉ハ大ニ生計ニ窮レ、紺
 屋ノ職ヲナシテ僅ニ日ヲ送レリ、今ノ紺屋町ト
 ハ此時ヨリ呼ビ始メシ名ナリ

三十余年ノ
辛苦

善西

享保ノ飢

宗泉斯ク困窮スト雖モ、西派ヲ思フノ念、片時モ
 止ミ難ク、屢辛苦ヲ犯シテ、再興ヲ計リタレモ、時
 至ラズシテ死セリ、是ヨリ西教寺ノ脈路絶へ、廣
 圓寺ノ末寺トナレリ、其ノ後廣瀬三次郎ナル浪
 人、宗泉ノ路ヲ繼ギ、三十余年ノ久シキ間、千辛萬
 苦ヲ嘗メ、明暦年中遂ニ東派ヲ離レ、西教寺ヲ再
 興シ名ヲ善西ト改メ、一意西派ノ隆昌ヲ計レリ

享保之大飢

古ハ交通ノ路開ケズ、此ノ國飢ユレバ、彼ノ國ニ
 執ルノ便ナキヲ以テ、凶歲ノアルヤ、領主ノ不仁
 ナル國ニ於テハ、民人ノ慘狀殊ニ甚シカリシ、享

大ニ倉庫ヲ
開ク

文政ノ大風
元録ノ火事

保十七十八兩年ノ如キハ、西國擧テ飢饉ニテ、餓死路ニ滿タリ、此時我ガ代官増田氏ニハ、大ニ倉庫ヲ發キ、數ヶ月間、一人一日米二合ノ割ヲ以テ、之ヲ救ヒケレバ、本郡人ハ幸ニシテ餓死ヲ免レ、其上種子料、牛馬飼養料ヲモ貸與セラレタリ、當時ニ在テハ誠ニ難有善政ナリシ

其ノ前後、凶歲火災多ク、殊ニ文政十一年ノ大風、元録十二年限ノ火事ノ如キハ、最モ甚シカリシモ、毎時相應ノ救助アリテ、搭別ノ慘酷ヲ極タル一ハナカリシ

減稅愁訴

古今ノ通患

天定テ人ニ
勝ツ

減稅愁訴

民ニ課シテ
冗用ヲ滿ス

民生ヲ安セ
ズ

專制時代ニハ、政令邊郷ニ達セズ、大平久シケレバ、民心懦弱ニ流レ、世淺季ニナレバ、汚吏出ツ、是レ古今ノ通患ニシテ、亦止ヲ得ザルナリ、然レモ汚法ハ永ク施ス可ラズ、酷刑ハ民ヲ服スル道ニ非ズ、人一時天ニ勝ツト雖モ、天定テ後、萬事自ト正ニ歸ス、壓制暴令豈久シク民心ヲ治スベケンヤ、頃ハ延享二年代官岡田正太夫制務ノ時ニ當テ、郡内ニ一大騷動起レリ、減稅愁訴是ナリ

是ヨリ以前代官ハ、將軍ニ奉スル租稅ノ外、別ニ人民ニ課シテ、自己ノ冗用ヲ滿セシガ、此ノ頃ニ至テハ、彌々甚シキヲ加ヘ、重稅ト酷刑ト、相伴フテ、下ヲ虐ゲケレバ、富家ハ誅求ニ苦ミ、貧人ハ生

明治聖代ノ
民暴政ヲ知
ラズ

一粒ノ余ナ
シ

城内筋十三
ヶ村
馬原ノ庄屋

ナ安ゼザルニ至ル、噫上ハ下ノ安寧ヲ計ル爲ニ、
設クル所ナルヲ、上ノ爲ニ、下民生ヲ安セサルニ
至ルトハ、抑モ何事ゾ、諸子ハ明治昇平ノ世ニ生
レ、聖明寛裕ノ治下ニ住ミ、謳歌シテ日ヲ送レバ、
未ダ暴政ノ何物タルヲ知ラザレトモ、諸子ガ祖
先ノ辛苦ハ、夢想スルダニ、恐怖ニ堪ヘサル計ナ
リ、夙夜辛苦シテ僅ニ獲タル米錢ハ、悉ク之ヲ官
ニ輸シテ、一粒モ余ス所ナク、妻子ハ路頭ニ叫ビ
老衰ハ溝壑ニ斃ル、如何ニ朦昧ノ細民ト雖モ、豈
之ニ堪ユベケンヤ、如何ナル酷法モ、憤怒ノ民心
ヲ抑ヘ得ベキ、茲ニ於テカ、城内筋十三ヶ村同盟
シ、馬原ノ庄屋兵衛門、自ラ進ンテ、領袖トナリ、之

正理ノ人民
勝ツ

上ニ乱スル
モノハ亂民

三人ノ死刑

國拂

ナ幕府ニ訴ヘタリ、諸子ハ演劇ニ於テ、彼ノ佐倉
宗吾郎ノ事蹟ヲ見シユトアラシ、未開ノ世ニ威
權強キ上ヲ相手トシテ、訴訟スルノ困難、果シテ
如何ゾヤ、幸ニシテ幕府ニ中興ノ明主アリ、此ノ
訴訟ハ正理ナル、吾々人民ノ勝利トナリ、間モナ
ク、減税ノ沙汰ハ下レリ、噫我勝テリ、勝テバ則チ
正義我ニ在ルナリ、然ルチ古ハ理ノ當否正邪ハ
措テ論セズ、兎角上ニ抗スルモノハ、亂民トナシ
テ、之ヲ法ニ行ヘリ、左レバ諸子ガ祖先ノ恩人タ
ル、庄屋穴井兵衛門、要助父子及惣次郎ナル三人
ハ、訴訟ニ及ブコト、上ヲ憚ラザル仕方ナリトテ、
死刑ニ處セラレ、余ノ重立タルモノハ、國拂トナ

功德無量

レリ、是實ニ延享三年十二月二十八日、今茲明治二十七年ヨリ百四十八年前ナリ
噫暴政ノ弊惡ハ、之ヲ論スルモ益ナシ、唯彼ノ三人死シテ、我ガ日田郡ヲ生セリ、其ノ功德ノ廣大ナル、其ノ精神ノ健氣ナル、古ノ大夫ト雖モ、豈之ニ過ギンヤ

豫讓ノ苦

浴場ノ復仇

孝弟美名

聞ク後日要助ノ弟某、父兄ノ冤死ヲ憤リ、密ニ仇ヲ報ゼントテ、身ヲ變シ、姿ヲ變シ、下僕トナリ、具ニ豫讓ノ苦ヲ重子、遂ニ浴場ニ於テ、岡田正太夫ヲ刺シテ、父兄ノ仇ヲ報ゼリトカ、其事蹟洒滅明ナラズド雖モ、此ノ父ニシテ、此ノ子アルハ、當ニ然ルベキ所、孝弟ノ美名、豈滅スルニ忍ンヤ

鹽谷代官ノ治蹟

鹽谷正義

二十余ノ代官

日田郡ノ恩人

鹽谷大四郎正義、文化十四年十月本郡ニ入り、天保六年八月マデ、十九ケ年間、郡政ヲ執レリ、抑モ我ガ日田郡ガ代官政治トナリシヨリ、二十余ノ代官來リ治セシモ、未ダ鹽谷氏ノ如ク、心ヲ民治ニ用イ、大業ヲ起シ、本郡萬世ノ大益ヲ企テタル人ハアラザルナリ
諸子ノ祖先ハ謂フ迄モナク、諸子モ、諸子ノ子孫、苟モ本郡内ニ生活スルモノハ、悉ク鹽谷代官ノ厚澤ヲ蒙ラサルハナシ、鹽谷氏ハ實ニ日田郡ノ大恩人ナリ、代官會テ曰ク、我輩人ニ恩アリ、豊人

美上下協同ノ
我ヲ愛スト、誠ニ清平ノ治、公益ノ事業ハ、上下相

小ヶ瀬井手
待ノ厚キニアラサレバ能ハザルナリ

限河通船
諸子ハ小ヶ瀬井手、及限河通船ガ、郡内ニ如何ナ

如何ニ困難ナリシカモ、想像スルヲ得ン、而シテ

此ノ大事ヲ企テシハ、實ニ搥谷代官ナリ

小ヶ瀬井手ハ文政六年ヨリ始メ、同八年滿三ケ

年ニシテ成レリ、限河通船ハ文政八年四月ヨリ

着手シテ、同十二月ニ成就セリ

其他園田ヲ築キテ、凶荒ニ備ヘ、敬神愛國ノ大義

ヲ明ニシ、孝悌ノ大道ヲ勵マシ、毎村伊勢 神宮

ノ遙拜所ヲ創立シ、或ハ孝經ヲ石ニ刻シテ、大原

園田
敬神愛國

孝經ヲ石ニ
祠前ニ建ツル等、銳意精勵一ニ心ヲ民事ニ委テ

身命ヲ抛ナテ、郡益ヲ計ラレタリ

慈眼山上ニ屹立シ、且暮笑ヲ含ンテ、郡内ヲ望ム

ノ石碑ハ、郡人ガ同氏ノ德ヲ慕フテ、建設セシ組

念碑ナリ、噫偉ナル哉、搥谷ノ谷代官ノ功績矣

偉哉搥谷ノ
功績

代官ノ末路

保元平治ノ亂後、政權武門ニ移テヨリ、朝廷ガ武

門ノ專横ヲ憎マセ給フ、ヤ久シ、歷朝未ダ曾テ武

門討滅ノ御企ヲ忘レサセ玉フ、ナク、建武中ニ

至リ、北條氏暴逆ヲ放ニスルニ當リ、遂ニ之ヲ討

滅シテ、王政中興セシモ、逆臣再ビ起テ、天下ヲ

歷朝ノ御憤

建武中興

文學勃興

大義明分

尊王攘夷ノ士

酷獄

維新ノ大業

久保田代官

蹂躪シ、政柄復永ク武門ニ歸シ、朝威益衰ヘシガ、
 徳川幕府ノ中世、文學勃興シテ、王室ノ尊ブヘク、
 君臣ノ大義ヲ盡スベキコトヲ、講ゼシヨリ、志士
 各所ニ起リ、其ノ末路、外船來泊シ、幕府失政多キ
 ナ機トシ、頻リニ尊王攘夷ノ說ヲ主張シ、盛ニ志
 氣ヲ鼓舞シケレハ、天下翕然トシテ之ニ向イ、海
 内大ニ騷動セシ故、幕府ハ武力ヲ以テ、之ヲ制セ
 ント欲シ、屢々残酷ノ刑獄ヲ起セシモ、彌々志士
 ノ憤激ヲ増シ、諸藩ノ望ヲ失イ、却テ自滅ヲ招ク
 ノ基トナリ、自然ノ大勢ハ駭々トシテ、王政復古、
 新維ノ大業ヲ促セリ
 此ノ時我ガ日田郡ハ久保田治部右衛門ナルモ

志士追捕

農兵

ノ代官タリシガ、幕政ノ日ニ非、ニシテ、天下ノ民
 心ニ背ケルヲ察セズ、自己ノ勇武才略ニ任セ只
 管無法ナル幕府ノ内命ヲ奉シテ、勤王ノ志士ヲ
 追捕シ、山國ノ高橋、宇佐ノ奥、本土ノ長等、苟モ勤
 王家ト見レバ、忽テ捕ヘテ、斬ニ處シ、或ハ獄ニ繫
 ケリ、此ノ時志士ノ入牢セシモノ、數十人ニ及ベ
 リ、噫、残酷モ亦極マレルカナ、斯ノ如ク捕吏ヲ四
 方ニ派遣シ、代官所ノ兵備完カラズ、且ツ不時ノ
 恐アルヲ以テ、人民中ヨリ、倔強ナル壯丁ヲ募リ、
 農兵ト稱シテ、警衛ニ供ヘタリ

代官久保田氏ノ出奔

王命ニ抗ス
ブルモノハ七

維新ノ大快
事

小倉ノ戦

森侯ノ侵入

代官出走

天ニ逆^テフモノハ、必ズ久シカワズ、王命ニ抗スル
モノハ、豈終ヲ全セシヤ、幕府如何ニ暴威ヲ放^カニ
スト雖^モ、不忠不義ノ大逆ヲ以テ、天人俱ニ怒ル、
天下ノ大勢ヲ支ユベキ、長州ニ敗レ、鳥羽ニ斃レ、
維新ノ王政全ク成レリ、噫何等ノ快事カ之ニ加
シヤ

初メ幕府長州征伐ノ舉アルヤ、久保田氏ニハ手
兵ヲ率ヒテ、小倉ヲ援ヒシニ、長兵勢強ク一戦ニ
討敗ラレ、這々ノ体ニテ、逃ゲ歸リシカ、鳥羽ノ戦
争以後、九州ノ諸藩悉ク朝廷ニ從ヒ、森藩久留島
侯、先ツ兵ヲ發シテ、本郡ニ侵入シケレバ、流石ノ
久保田モ大ニ恐レ、身ヲ脱シテ、先ツ逃レ、中川ヨ

リ津江ヲ經、肥後ニ出デ、僅ニ免ル、ヲ得タリ、續
テ諸役人、悉ク逃ゲ去リシガ、多クハ中途ニテ捕
ヘラレタリ

代官庄屋

年限官

文武相兼ヌ

徳川時代ノ代官ハ、幕府ヨリ派遣スル年限官ニ
シテ、將軍ノ直轄地タル、公領内ノ人民ヲ治メ、租
税ヲ徴收シ、訴訟ヲ聽ク等、大名ト異ナルヲナク
今ノ郡長、裁判官、警察官、時ニハ兵隊ノ司令官ヲ
モ兼テタルモノニシテ、其ノ從臣ノ如キモ、平時
ハ牙籌ヲ執ルノ官吏タレトモ、一旦事アルトキ
ハ、馬ニ跨リ、劔ヲ提ゲ、矢石ノ間ニ出入スルノ軍

九州探題

卒タリ

或ハ一所ノ代官ニシテ、假ニ他ノ公領ヲ支配スル者モアリ、殊ニ本郡代官ノ如キハ、陰ニ九州大名按察ノ任ヲモ帶ビタル故、大ニ威勢ヲ振ヒ、小藩ノ如キハ虎豹ノ如クニ恐レ、時トシテハ大藩モ震盪セラル、トアリキ

町年寄庄屋

代官ノ下、町ニハ町年寄アリ、村ニハ庄屋アリ、町村内一切ノ世話ヲナセリ、是レハ總テ世襲ノ役人ニシテ、町村内ノ名家タリ

組頭肝煎

町年寄庄屋等ハ自宅ニアリテ事ヲ取り、其下ニ組頭アリ、肝煎アリ、俱ニ公事ニ奔走セリ、而シテ其ノ俸給トシテハ、家屋ノ修繕農務等ヲ人民ニ

課セリ

租 稅

年貢	田畑ノ稅ヲ年貢ト云ヒ、其ノ納方ハ、稅高ヲ三分
米納金納	シ、二分ハ米ヲ納メ、一分ハ金ヲ納ムルコトアリ、或
四公六民	ハ米納ノミノコトモアリ、大抵四公六民ニシテ、其
檢見定免	稅ヲ定ムルニハ、檢見、定免ノ二法アリ、當時本郡
小物成	ノ田畑ハ(畑三反ヲ田一反ニ準シ)千四百九十八
運上冥加金	町ニシテ、石高二万七千八百石ナリ
浮役	雜稅ニハ、小物成トテ、野錢、山錢、林錢アリ、運上ト
	テ、營業稅アリ、冥加金トテ、所得稅アリ、浮役トテ、
	漁獵等ニ課スル稅アリ、又地子錢トテ、公田ノ剩

地子錢

町村雜費

役目

年季賣

寺小屋

田、又ハ家屋等ヲ借用セシ人ヨリ徵收スル稅アリ、是ハ元祿年中、代官三田守長ノ時ニ始マレリ。其ノ他町村内ノ諸雜費、道路橋梁ノ造築費、代官所家屋修繕費等アリ、是等ハ多ク役目トテ、人夫ヲ出スヲ常トセリ。

德川時代ニハ今ノ如ク、田畑等ヲ勝手ニ賣買スルヲ能ハズ、多ク年季賣トテ、一旦賣拂イタルモノモ、年季ノ間ハ勝手ニ受返ス事ヲ得ル様ニ定メタリ。

教育宗教

舊來人民ニハ學校トテハナク、寺小屋トテ御寺

漢籍塾

塾ノ先生

塾ノ成立

ノ和尚様ヤ、御庄屋様等ノ自宅ニ就テ、いろは、人名、村名、商賣往來、實語教、女子ハ別ニ女大學、今川等ヲ習字ト讀方トテ兼テ學ベリ、寺小屋ノ上ニハ、塾ト云フモノアリテ、四書等ノ漢籍ヲ教授セリ。

然レトモ此ノ塾ハ何所ニテモアルニアラズ、唯ダ有名ノ學者出ツルトキハ、自ラ子弟ノ囑ニ依テ、教授スルノミニシテ、此ノ塾ニ入ルモノハ至テ稀ナリ。

寺小屋モ、塾モ、私立ニシテ、政府モ町村モ、更ニ關スル所ニアラサレバ、其ノ組立モ、方法モ、總テ師匠タル人ノ勝手ニシテ、授業料等モ定リタルモ

束脩

ノハナク、大抵初ノ入學ノ時、束修トテ幾何カノ金ヲ出シ、其ノ他ハ節句ノ附屆、或ハ臨時ノ加勢等ニシテ、萬事至テ簡單ナリ

師弟ノ厚誼

然レトモ師弟ノ誼ハ隨分厚クシテ、一朝師匠ト仰ケバ、終身參賀招筵ノ禮ヲ怠ラサルモノ多シ、

家業墨守

且ツ家業ハ其ノ人ノ適否ヲ問ハズ、之ヲ世襲スルモノト、定メ居リシヲ以テ、各自ノ職業ニ依テ、

教養ノ方法ヲ異ニセリ

宗教ニ冷淡

本郡ハ七百年來總テ佛教ノミナリシガ、一時儒教ノ盛ナリシ故ニヤ、人民ノ神佛ヲ尊崇スルコト、他郡ニ比シテハ、一般冷淡ニシテ、僧侶ノ威權甚ダ高カラズ、名僧善智識ノ聞モ少キ方ナリ、郡

永興寺

傳來寺

内ニテ寺院ノ最モ古キハ、城内ノ永興寺、津江ノ傳來寺等ナリ

風俗

以死事君
上下ノ別
男女ノ間
敦厚ノ美風

徳川時代ニハ、君臣主僕ノ間嚴格ニシテ、忠義ヲナスニ死ヲ吝マサルモノアリ、貴賤上下ノ別甚シク、從テ男女ノ間嚴正ニシテ、淫靡ナラズ、風俗總テ純朴ニシテ、廉耻ヲ尊ビ、信義ヲ重シ、敦厚ノ風尙フベキモノ多シ、此ノ時分ノ借金ノ古券ニハ若此金子拂ヒ申サズ候ハ、我等人ニテ有之間敷トカ、又人中ニテ御笑ヒナサレ候トモ、一言ノ申分モ無之候ト、書ケルモノモアリ、諸子ノ祖

先ガ如何ニ正直ニシテ、人ヲ信スルノ厚キカヲ
見ルベシ

單純ノ生計

奢侈物ノ始

祇園ノ山鉾

侯伯召集

御用達掛屋

又此頃ハ服装、結髪、家屋、酒食等モ至テ單純ナリ
シガ、幕府ノ末世ニ至リテハ、昇平ノ餘リ、大ニ華
美ノ風ヲ尊ビ、料理屋、飲食店、平民ノ絹布ヲ服ス
ルヲ、婦人ノ紅粉、白粉、前髪立、鬢付、其ノ外日傘ヲ
用ユルヲ、婚儀、葬送、神事等ヲ誇大ニナスヲ等、舉
テ此ノ時代ニ起レリ、豆隈祇園ノ山鉾ノ如キモ、
亦正徳四年ニ始マレリ
抑モ日田ハ幕府教令ヲ布ク爲メ、九州ノ侯伯ヲ
一時ニ、此ノ地ニ召集スルヲ、度々アリシヲ以テ、
市街非常ニ繁昌シ、各地ノ諸侯ハ、此地ニ御用達

經濟家

殷富財力

華奢ノ弊風

トテ、豫メ金子ヲ預ケ置キ、有用ノ時、取出シテ使
用スヲアリ、之レ代官ノ掛屋ト同シキモノナリ、
故ニ本郡ノ人ニハ、經濟ニ通スルモノ多ク、廣瀬
氏ノ如キハ、府内ノ財政ヲ握リ、大ニ之ヲ改革セ
シヲアリ、斯ク當時諸藩ノ財政ニ預リシモノ多
カリシ故、殷富財力僻地ニ任ズ、今猶富豪ノモノ
多キハ、蓋シ之カ爲メナラン、而シテ此ノ富饒ナ
ル財力ハ、自然ノ勢ヲ以テ華奢ノ媒ナシ、維新
ノ畫一以後、金錢ノ融通減少セルモ、華奢ノ弊風
ハ、依然存在シ、猛烈ナル勢力ヲ以テ、本郡ノ風教
利益ヲ遏絶スルコト少カラズ
抑往昔幕府ノ直轄地ニハ、其ノ威權ヲ保ツ爲メ、

公領ノ治外
法權

馬ヲ劇場ニ
驅ル

日田風

唯一ノ武器

百折不屈

今ノ治外法權等、其他種々ノ特權ヲ與ヘラレタ
ルヲ以テ、細民ハ之ヲ傘ニ特ミ、他ノ私領ニ入テ
ハ、專ラ暴行ヲ振舞ヒ或ハ馬ヲ演劇場ニ驅テ、見
物ヲ妨ケ或ハ少シニテモ意ニ滿タサルコトアレ
バ相結ヒテ之ヲ打撃シ、或ハ家屋器具ヲ毀テ、以
テ自ラ勇ナリトナシ、專横跋扈至ラサルナク、稱
シテ日田風ト云ヘリ、蓋シ權利ヲ妄用スルハ、君
子聖人ニアラザルヨリハ、人情トシテ免カレサ
ル所ニシテ、狂俠漢等ハ之ヲ以テ、唯一ノ武器ト
ナスハ、深ク咎ムベキニ非ズ、况ンヤ此ノ日田風
ハ唯無法ナル暴逆ノ振舞ノミニ非ズシテ、百折
不屈剛毅奮進ノ一大美風ヲ有スルヲ於テチヤ、

何ゾ一大偉
業ヲ試ミザ
ル

一種ノ異風

仙人主義
文人風
文學ノ華美
術ノ光彩

然ルニ維新以來、全國ヲ通シテ制度畫一、法律同
等ニナリシヲ以テ、容易ニ日田風ヲ吹スルコト能
ハザルニ至レリ左レドモ餘勇凜々今尙存シテ
亡ビズンハ、之ヲ他方ニ溢出シ、世界ニ向テ何ゾ
一大偉業ヲ試ミザル
本郡ニハ猶一種ノ異風アリ、其ノ習生産營利ヲ
重セザルモ、純粹ノ崇儒尊德ニアラス、サリトテ
又神佛ヲ忘信スルニモアラス、所謂未來ヲ謂ハ
ス、現世ヲ尊ハス、書畫ヲ弄ビ、花月ト相戯ル、則チ
仙人主義文人風是ナリ、此ノ風習、頗ル蔓延シテ、
今猶盛ナリ、抑モ文人墨客ハ、文學ノ華、美術ノ光
彩ニシテ、大ニ稱スベク、其ノ地方ノ名譽トモナ

最上ノ道德
無用ノ長物
レハ、一二ノ此ノ如キ人物ハ必要ナルモ、此ノ風
習ニシテ、全体ニ及フトキハ、實業ヲ賤ミ、營利ヲ
厭フノ弊アリ、今ヤ文化日進、社會ノ公益ヲ計ル
ヲ最上ノ道德トナシ、正經ノ職業ヲ有スルヲ以
テ、人道ノ要務トナセバ、風流閑散、無事ニ日ヲ消
スルハ、國家ノ富強ヲ害スル長物タルヲ免レサ
ルナリ

日田文學

日田文學ノ
盛名
淡窓先生
日田文學ノ名、一時天下ニ轟キ四方志學者ノ敬
慕スル所タリ、而シテ此ノ盛名ハ、一二淡窓先生
ノ在リシ故ナリ、先生姓ハ廣瀨名ハ建、通稱ハ求

桃秋月化

馬、淡窓ハ其ノ號ナリ、天明元年ニ生レ、安政三年
ニ死ス、年七十五、先生ノ文ヲ桃秋、祖文ヲ月化ト
號ス、俱ニ俳諧ノ宗匠タリ

苦學

先生商家ニ生レテ多病ナリ、家ヲ弟某ニ讓リテ、
專ラ學ニ志ス、其ノ松下及ヒ龜井ノ塾ニアルヤ、
刻苦勉學至ラサルナク、能ク艱苦ニ堪ヘ、儉薄自
ラ奉シ、塾ヲ退クノ後、獨學具ニ螢雪ノ苦ヲ重ヌ、
其ノ學成リ惟テ郷里ニ下スヤ、四方争フテ贊ヲ
執ル者前後三千ニ及ブ、日田ノ咸宜園是ナリ、先
生天資嚴正ニシテ、篤實、深ク質素ヲ尊ヒ、實踐ヲ
重メ、天保中官其ノ教授廣及、並ニ德行ヲ賞シテ、
姓氏帶刀ヲ許ス、先生ノ著書、折立、義府、迂言、淡窓

弟子三千人 咸宜園

官賞ヲ受ク

著書

學旨

小品、老子適解等アリ、其ノ學大觀ヲ主トシ、人ト異同ヲ争ハズ、世通備ト稱ス

門下ノ偉才

門下多ク偉才ヲ出シ、或ハ藩政ヲ改革スルモアリ、或ハ維新ノ大業ニ與リ、天下ノ大政ヲ議スルニ至ルモノ亦少カラズ、今ノ安藤、清浦、大渡、秋月、龜谷、長、中村、鳥居、奥、高橋、俣野、朝吹、成瀬等皆ナ其ノ門下ニ出ツ、先生詩名夙ニ天下ニ著ル、彼ノ遠思樓詩集ノ如キ、苟モ文學ニ志アルモノハ、之ヲ知ラサルモノナシ、門生亦詩ヲ能スルモノ多シ、宜園百家集ノ如キ、以テ觀ルベシ、就中中島米華、高妻芳洲、秋月伯起ノ如キハ殊ニ傑出セリ、先生ノ弟旭莊、名ハ謙吉、其ノ子林外、名ハ孝之助

遠思樓

宜園百家集

旭莊林外

青村

宜園生徒五千余人

園田謙吾

村上姑南

廣瀬貞文

諫山東作

吾岳上人

ト云フ、而シテ先生別ニ高弟青村(本姓ハ矢野名ハ範次)ヲ養フ、孰レモ宜園ヲ相續シテ、門生ヲ教授ス、學識詩文俱ニ其ノ益與ヲ究メ、學徳一家ニ蒐リ、宜園門下ノ生、前後五千余ニ及フ、咸宜園ハ廢藩ノ時、一旦廢塾セシガ、明治十二年ヨリ淡窓先生ノ門人、園田謙吾、村上姑南、相繼テ書生ヲ教ヘ、十七年ニ至リ、青村ノ長男貞文、宜園ヲ再興シ、英學數學ノ二科ヲ加ヘ、同二十年ヨリ、諫山東作代テ教授セシカ、二十六年諫山氏死シテ、宜園亦廢レタリ、吾岳上人名ハ岳、姓ハ平野、文化六年ヲ以テ生マル、限專念寺ノ僧ナリ、詩書畫ヲ以テ天下ニ著ル、

清雅高逸

仙骨現ル

三洲長茨

苦學ト勤王

手跡泰斗

世之ヲ三絶僧ト云フ、天性清雅高逸、妻ヲ娶ラズ、門生ヲ需メズ、權貴ニ屈セズ、營利ヲ貪ラス、得々トシテ自ラ安スル所アリ、稜々トシテ仙骨現ル實ニ一代ノ真文人ナリ、其ノ書畫ハ世人ノ最モ珍重スル所ニシテ、其價亦貴シ

長三洲名ハ茨、中川村八瀬ノ一貧家ニ生ル、其ノ父ハ彦山ノ浪人ニシテ、寺小屋ノ師匠タリ、三洲幼ヨリ苦學怠ラズ、時恰モ幕府ノ末路ニ際シ、勤王ノ志ヲ抱テ、四方ニ流離シ、幾度カ辛酸ヲ嘗メ、命ヲ危クセシトモ屢々ナリシガ、遂ニ明治ノ聖代ニ遭遇シ、恐レ多クモ、長キアタリニ近侍シテ、權貴ヲ極メ、手跡ノ泰斗ト仰カル、ニ至ル

素封學者

夕田

田日田文學
一掃痕根ヲ
止メズ

素封ノ家ニ生レ、勉學怠ラス、性豪壯淫靡ヲ厭ヒ、書畫ノ妙ヲ究メテ、其ノ名天下ニ著ル、モノハ、千原夕田翁ナリ

噫日田ノ文學ハ、斯ノ如ク夫レ隆盛ヲ極メタリシモ、今ヤ老師悉ク去リ、宜園亦廢レテ繼クモノナク、堂々タル日田文學ハ、一掃シテ復タ痕根ヲモ止メズ、徒ニ虛名ヲ有スルニ至ル、豈慨歎ニ堪ユヘケンヤ

日田歴史 四

維新改革

政權奉還

藩知事
縣令

幕府ハ遂ニ天下ノ大勢ニ抗スルヲ能ハサルヲ
 悟リ、徳川十五代將軍慶喜、政權ヲ奉還シケレバ
 是ヨリ古ノ王政ニ復シ、主上親シク政柄ヲ握リ
 明治ト改元シ、舊習弊風ヲ洗滌シ、百度ヲ釐革シ、
 綱紀ヲ張り、文化ヲ勵マシ、維新ノ大勳ヲ奏シ給
 フ、此ノ時私領ハ舊來ノ藩トナシ、領主ノ知事ト
 ナシ、公領ハ府縣トナシ、朝廷ヨリ官吏ヲ派遣シ

日田縣

テ之ヲ治セシム、時ニ我日田モ亦縣トナリ、松方助左衛門縣令トシテ久保田代官亂政ノ跡ヲ繼ギ、能ク新政ノ大旨ヲ奉シ、大ニ政度風俗ノ改革ヲ計レリ、本校ノ教員局、三四年ノ教場、及尋常小學校ハ當時ノ縣廳ニシテ向ノ裁判所ハ縣令ノ官宅タリ、是皆松方氏ノ築ク所ナリ、縣令ノ下ニハ大參事アリ、小參アリテ之ヲ贊ケ、其ノ他ノ吏員ハ多ク地方ノ才識アルモノ、及事務ニ熟練セルモノヲ登用シ、敢テ其ノ門地ヲ問ハズ、大ニ人才ノ進路ヲ開ケリ、或ハ後醍醐天皇ヲ龜山ニ祀リ、或ハ人倫ノ矯正ヲ計ル等頑民新政ヲ悦バザル、創造紛擾ノ際ニ當テ、毅然不動其ノ政績ノ見

縣廳

官宅

人才登庸

偉績

松方伯

內閣總理大臣

寬典ニ乘ズルノ民

ルヘキモノ多シ、豈偉ナラスヤ
 松方伯人トナリ、忠勇ニシテ仁慈ノ志篤ク、資性剛毅能ク治体ニ通ズ、固ヨリ一地方ニ踞勝スルノ才ニ非ズ、其ノ後日雲蒸龍變、遂ニ天下ノ政柄ヲ握ルニ至ル亦宜ナル哉

暴動

政府改革ノ事ニ急ナルヤ、頑民守舊ノ徒、往々之ヲ厭惡シ、酷刑峻令ヲ除キ法網ノ寬ナルニ乘シテ暴動ヲナスモノ不少、我日田ニモ屢々其ノ徵候ヲ現セシモ、制御其ノ道ヲ得タルヲ以テ、敢テ爆發ノ暇ナカリシガ、明治三年ノ冬、縣令大參事

暴動

高橋等ノ死

熊本豊津ノ
來鎮

廢藩置縣ノ
大詔

廢日田縣

上京シテ縣廳空虚ナルニ乘ジ、頑民遂ニ徒ヲ結
ビテ一時ニ爆發シテ暴舉ヲ企テシ故、官農兵ヲ
發シテ之ヲ防キシモ、容易ニ制スル能ハズ、農兵
長高橋其他數人、暴民ノ爲ニ殺サレタリ、茲ニ於
テカ熊本藩豊津藩兵ヲ發シテ來リ援フ、其ノ末
ダ全ク至ラザルニ、暴徒ハ早クモ恐怖シテ、忽テ
鎮靜セリ

廢日田縣附新令

明治三年松方縣令上落ノ後、野村森下ノ二氏、相
繼テ暫ク政務ヲ執リシガ、同四年廢藩置縣ノ大
詔降ルヤ、日田縣ヲ廢シテ郡トナシ、大分縣ニ屬

郡長戶長

郡長ノ姓名

平民ニ姓ヲ
許ス

シ、大區長、區長、戶長ヲ置テ、郡村務ヲ治セシニ、大
區長ハ間モナク之ヲ廢シ、明治十一年郡制ヲ改
メ、郡長ヲ置キテ、郡内ノ總務ヲ司ラシメ、町村ニ
ハ民撰戶長ナルモノヲ設ケテ、之ヲ治セシガ、十
八年ヨリハ復官撰戶長トナレリ

本郡郡長ノ人名

桑名 豐山 十一年十一月來任

新庄 關衛 十八年 來任

菊村 德 十九年四月 來任

小倉 左文 二十一年二月來任

出 事 廿四年十二月來任

是ヨリ先キ明治三年九月、平民ニ姓氏ヲ稱スル

穢多非人ノ
稱ヲ廢ス

トナ許ス

四年四月ニハ散髮廢刀ヲ許シ、穢多非人ノ稱ヲ廢シテ、民籍ニ編入ス、五年ニハ大陰曆ヲ廢シテ

大陽曆

大陽曆ヲ行ヒ、明治五年十二月三日ヲ以テ、六年一月一日トナス

徵兵令

五年徵兵令教育令發布セララル、同年裁判所(豆田

裁判警察郵便

裁判所ハ明治十一年一月二十日ニ設ク(警察署

大祭祝日

郵便局設置ノ令アリ

六年一月五節ヲ廢シ、天長節大祭祝日ヲ安息日

トナス

證券印紙地租改正

同年二月ニハ證券印紙貼用令アリ、地租改正令

アリ

新令民ヲ驚カス

其ノ他新令多ク、人民ハ令出ツル毎ニ吃驚ヲ喫スル計ナリ

地租改正

官有地民有地

百分ノ二半

封建ノ世ニハ、各藩ノ地租、輕重相異ナリシヲ以テ、明治六年七年、田地貢租ヲ改正シ、天下ノ地所ヲ官有、民有ニ分テ、民有地ニハ地券ヲ發シ、地價ヲ定メ、地價百分ノ三ヲ以テ地租ト爲シ、民有地ノ賣買ハ、人民ノ自由ニ任タレ、遺地、開墾地等、地形ヲ變スルモノハ、官ノ許シヲ得セシム、後明治十年一月減租ノ詔アリ、地價百分ノ二半トナル

地方税

地租ノ次ニ地方税アリ、是レハ縣會ノ議定スル所ノ、縣内ノ學事土木勸業警察等ノ費用ニ充ルモノナリ

郡費

町村費

税法輕減

營業税

又郡税アリ、郡會議定スル所ノ、郡内ノ諸費ニ充ツ、其ノ他町村ニ關スル費用アリ、是等ハ皆地租七分ノ一ヲ超過スルヲ得ズ、之ヲ要スルニ、税法古ニ比スレバ、大ニ輕減シテ、民庶肩ヲ憩フノ聖恩ニ浴スルヲ得ル、併シ古ハ農ヲ重トシ、商ヲ輕ゼシヲ以テ、營業税ハ、至テ少ナカリシモ、方今商業盛ニ開ケ商權亦強ケレバ、營業税ハ幾分重クナレ、是レ自然ノ勢ナリ

徵兵令

海内皆兵

步騎砲工兵
憲兵

一年志願兵

徵集猶豫

國民軍

明治五年、各藩ヨリ召集セル兵ヲ解キ、新ニ徵兵令ヲ發シ、士農ヲ分タズ、海内皆ヲ兵トス、此徵兵令ハ、其ノ後屢々少々ノ改正アリタルガ、結局常備、豫備、後備、國民ノ四軍トナシ、又步騎砲工等ノ科アリ、十四年ニハ憲兵トテ、兵士ヲ監督スル、一種ノ兵ヲ設ケ、廿二年ニハ止ヲ得ザルモノ、爲ニ、自費ヲ以テ、一年志願兵トナルヲ許シ、其ノ他學生ニハ猶豫ヲ與フルヲアリ、國民軍ハ全國ノ男子、十七歳ヨリ四十歳マデヲ兵籍ニ載セ置キ、全國大擧ノアルトキニ備フ

常備軍ハ全國ノ男子二十歳ノモノヲ徵集シテ、

三年ノ現役ニ服セシム

豫備軍ハ常備軍ノ服役ヲ終リシ者ヲ以テ編製

シ、更ニ四年ノ服務アリ

後備軍ハ豫備軍ヲ終リシモノヨリ編製シ、尙五

年ノ役ヲ帶ビ、豫備軍ニ次キテ召集ス

近衛兵

常備軍ヨリ近衛兵ヲ撰拔シテ、京城ノ守衛ニ充

ツ

海軍

海軍ハ海軍ニ適シタルモノ、及志願者ヨリ採用

ス

初メ徵兵令ノ出ヅルヤ、人民兵役ヲ嫌ヒテ忌避

スルモノ多ク、或ハ隱匿シ、或ハ籍ヲ詐リ甚ダシ

血税ノ語

キハ自ラ肢体ヲ折傷シテ、道レシテ計ルモノ
アリ、又徵兵令ニ血税ノ語アルヲ見テ壯丁ノ血
ヲ搾リテ、國用ヲ足スモノト思ヒ、蜂起シテ亂ヲ
ナサント欲スルモノモアリ、又止ヲ得ズ出役ス
ルニ至ルヤ、親戚舊故相會シテ、悲愁スルト死ヲ
甚シ

悲愁死ヨリ

甚シ
噫男子ノ最モ榮譽トスヘキ兵役ニ赴クヲ悲ミ
百方逃レシテ計ル、愚蒙不忠モ亦甚シト云ヘ
シ、語ニ頑民ノ俱ニ其ノ初ヲ計ル可ラス、俱ニ其

頑民ハ俱ニ

終ヲ樂ムヘ
ノ終ヲ樂ムヘシト眞ニ然リ、今ヤ軍役ニ入ルノ
勇壯榮譽ニシテ、國家ニ忠愛ナルト辨ゼザル
モノナク、自ラ奮テ志願スルモノ、年ニ其ノ數ヲ

志願者

加フ、噫亦美ナル哉

地方警察

地方警察
 警部長
 警部
 巡查
 駐在所
 司法行政兼務

明治四年令シテ、地方警察ヲ置キ、人民保護、惡徒
 糺彈ヲナス、其ノ制本署ヲ縣廳内ニ置キ、警部長
 之ヲ總ヘ、各郡ニ警察署ヲ設ケ、警部アリテ之ヲ
 管シ、其ノ下ニ巡查ヲ置キ、初ハ警察署ヨリ順番
 ニ巡回セシガ、明治二十一年ニ至リ、各町村ニ一
 名ツ、巡查ヲ配置シ、署長ノ命ヲ奉シ、便宜事ヲ
 執ル、之ヲ駐在所ト云フ、夫レ警官ハ司法ト行政
 トヲ兼テタルモノニテ、惡徒ノ糺彈ヨリハ良民
 ノ保護ニ緊要ナルモノナリ

郵便電信

郵便局
 爲替條令
 電信
 小包郵便
 書狀
 書留料
 書畫寫真

明治五年令シテ、全國一般郵便局ヲ設ケシメ、信
 書往復ノ便ヲ計ル、繼テ爲替條令ヲ布キ、金銀運
 送ノ利アリ、其ノ後(本郡ハ二十一年五月)電信ヲ
 設置シテ、急用ノ便ニ供ス、爾後少許ノ改正アリ
 シガ、昨二十六年ニハ小包郵便法ヲ施行シテ、貨
 物運送上一層ノ便利ヲ與ヘラレタリ
 書狀ハ目方二匁迄二錢、四匁迄四錢、以上二匁每
 ニ二錢ヲ増ス、書留料ハ一個ニ付六錢
 書畫、寫真、農産物種子ハ、目方三十匁迄二錢、同六
 十匁迄六錢、以上三十匁毎ニ二錢ヲ増ス

小爲替
郵便爲替

郵便小爲替ハ金三圓ヲ限トス、手数料三錢
郵便爲替ハ三十圓ヲ限リトシ、手数料五圓ニ付

電信料

四錢、十圓六錢、二十圓十錢、三十圓十五錢
電信ハ手数料十五錢ニシテ、片假名十字ヲ一音

電信爲替

信トシ、手数料ノ外、一音信毎ニ十錢ヲ納ム
電信爲替料五圓ニ付二十八錢、十圓三十錢、二十

小包法

圓三十五錢、三十圓四拾錢
小包法ハ、荷物曲尺二尺立方、其運賃ハ左ノ如シ

東京ヨリ大
分縣ハ三百
里以上ノ部
ナリ

小包

八十里	六十里	四十里	二十里	二百匁	四百匁	六百匁	八百匁	一貫	一貫二百匁	一貫五百匁
九	八	七	六	八	一〇	一二	一四	一六	一七	二〇
一四	一二	一〇	八	一〇	一二	一四	一六	一八	二〇	二二
一九	一六	一三	一〇	一六	一九	二二	二四	二六	二七	三〇
二四	二〇	一六	一二	二〇	二四	二八	三二	三六	三九	四三
二九	二四	一九	一四	一九	二四	二九	三四	三九	四四	四九
三六	二九	二三	一七	二二	二七	三二	三七	四二	四七	五二
四三	三四	二七	二〇	二五	三〇	三五	四〇	四五	五〇	五五

運賃表

百里	二百里	三百里	四百里	五百里	六百里	七百里	八百里	九百里	以上
一〇	一二	一四	一六	一九	二二	二五	二八	三二	三五
一六	一九	二二	二五	二九	三三	三七	四一	四六	五一
二二	二六	三〇	三四	三九	四四	四九	五四	五九	六四
二八	三三	三八	四三	四八	五三	五八	六三	六八	七三
三四	四〇	四六	五二	五八	六四	七〇	七六	八二	八八
四二	四九	五六	六三	七〇	七八	八五	九二	九九	一〇六
五〇	五八	六六	七四	八二	九〇	九八	一〇六	一一四	一二二

郡有金紛議

民費ノ過金

維新創造ノ際、諸規則未ダ確定セザルヤ、民費徴
取ニ過金ヲ生シ、其ノ後之ヲ各郡ニ返附セラレ
タリ、之ハ人民各自ニ配下スベキモノナレドモ、
當路ノ有志者ハ之ヲ保管シテ、郡有金トナス方、
利益ナリトテ分配ヲ止メ、郡ノ基本金トナセリ、

郡有金

助合穀
一万余圓

郡役所議事
堂建築ノ議

學校基本金

是レ各郡共ニ郡有財産ノアル故ナリ、而シテ本郡ニハ、助合穀トテ、代官時代ニ凶荒ニ備ヘタル金アリケレバ、之ヲモ郡有金トナシ、一万余ノ財産アリシガ、十九年菊村郡長ノ時聯合會之ヲ以テ、郡役所、議事堂ヲ建設セント議セシモ、種々ノ事情アリテ、其ノ事成ラズ、其ノ後廿三年、小倉郡長ノ時、遂ニ建設スルコトニ決シ、其ノ殘額ノ處分ニ到テ、非常ニ紛議アリシモ、結局其ノ内三千圓ハ高等小學校基本金トナシ、其ノ余ハ之ヲ各町村ニ分配セリ

此ノ郡有金ニ就テハ、縣廳ノ干涉モアリ、或ハ借入者滯納訴訟等アリ、之ト同時ニ福岡縣管轄替

郡内沸騰

自治制

放任主義

ノ議起リ、郡内頗ル沸騰セリ

町村自治制

町村自治制トハ、自分ノ町村ハ己等ノ意見ニヨリテ之ヲ治ムルノ謂ナリ、町村政治ハ舊幕府時代ヨリ種々ノ變遷ヲ受ケ、遂ニ當今ノ制ヲ來タシヌ、幕府ノ時ニハ格別ノ規則モナク、別段ノ法律モナク、人民ノ自由自儘ニ任セタルヲ以テ、別ケテ記載スヘキコトアルナシ、所謂非常ノ放任主義ヲ以テ、之ヲ治メタルナリ

幕府亡ビテ、明治維新ノ御代トナリ、全國一般ニ朝廷ノ有ニ歸シ、町村ニハ悉ク戸長ヲ置キテ之

戸長専制

ヲ治メシム、然ルニ今度ハ舊時ノ放任ニ引換ヘ
爲ス、スル、一切上官ノ命ヲ受ケテ、戸長之ヲ
定メ、一言モ人民ノ口ヲ入ル、ヲ許サス、人民ハ
只仰キテ之ヲ見ルノミ、所謂戸長専制ノ時代ナ
リキ

非常手段

蓋シ此時ハ人民ノ知識未ダ進マズシテ、己レノ
世話ヲ自ラナス能ハス、且非常ノ手段ヲ以テス
ルニアラサレハ、人心舊時ノ弊風ニ安シテ、世習
ノ朦昧ハ自ラ改ムルニ困難ナルヲ以テ戸長専
制ノ時代ヲ作りタルモ、亦勢己ムヲ得サルニ出
テシナリ

其後人民ノ智識漸ク開ケ、最早自由ニ己ノ世話

見物政治

ヲナスヲ得ルニ至リ、復舊時ノ見物政治ニ安セ
サルヲ以テ今度政府自治制ヲ布キテ、人民ニ自
ラ治メシムル様ニナシタルナリ

自ラ己ヲ治

抑モ自治制ハ政府ノ關涉ヲ受ケズ、人民自ラ己
ヲ治ムルモノニシテ、政府ハ只政治ノ大綱ヲ示
スノミナリ、故ニ假令世話ノ仕方宜シカラサル
モ、此レハ自分等ノ惡シキモノナルヲ以テ、人民
ハ他ニ向ヒテ不服ノ言ヲ吐ク能ハズ、政府モ亦
大ニ手數ヲ省キ、面倒少クナリテ、至極便利ナ
ル政治ナリ、此ノ便利ナル政治ガ、早クヨリ行ハ
レサリシハ、全ク人民ノ智力、未ダ開ケザリシニ
ヨリナナリ

便利政治

種々ノ人民
集合

人民ノ種類

公民

吾々ハ今ヨリ此社會ニ入りテ充分都合ヨキ様、
 此政治ヲ取り扱ハザルベカラザルナリ
 町村ハ種々ノ人民ノ集合セルモノニシテ、其中
 ニハ赤貧洗フガ如キ、無一文ノモノモアリ、或ハ
 富巨万ヲ重チタル豪士アリ、或ハ風癪ノ白痴、眼
 ニ一丁字ナキモノアリ、又普通ノ智識ハ之ヲ具
 ヘタルモ、一家ノ從僕タルニ過ギザルモノアリ、
 時トシテハ体軀ノ外、何一物ヲ有セザルモ、惡事
 ハ善ク之ヲナシ得ルモノアリ、此等ノ人ニハ何
 レモ同シク、世話ヲナサシムルカト云フニ、決シ
 テ然ルモノニアラズ、故ニ人民中先ヅ公民ナル
 モノヲ定メ、之ヲ世事ニ關セシム、公民ノ資格左

公民ノ資格

ノ如シ

- 第一日本帝國ノ臣民タルコト
- 第二非常ノ惡事ヲナサ、リシコト
- 第三二十五才以上ノ男子タルコト
- 第四一家ヲ建テ居ルコト
- 第五財産ノ世話ヲナスコトヲ禁セラレザリシ
コト
- 第六二年以上町村ニ住シタルコト
- 第七二年以上町村ノ役目ヲ務メタルコト
- 第八若干ノ地租ヲ納メタルカ、又ハ營業稅所
得稅等、即チ直接國稅ヲ二圓以上納ムル
コト

右ノ八個條、一モ欠クルコトナキモノハ公民ト稱シテ、其町村ノ政治ヲナスニ與カルヲ得ル、之ヲ以テ町村内一家ヨリハ、大抵一人ノ公民ヲ有ス、而シテ小ナル所ノ公民ハ悉ク一室ニ相會シテ評議スルヲ得レドモ、少シク大ナル町村ハ、甚ダ困難ナリ、故ニ公民ハ投票ヲ以テ評議スル人ヲ撰出ス、之ヲ議員ト云フ

投票撰定

議員

兩級ノ選舉人

被選人

選舉人ハ分テ二級トナス、選舉人中直接町村税ノ納額多キモノヲ合セテ、選舉全員ノ納ムル總額ノ半ニ當ル者ヲ一級トシ、其ノ他ノモノヲ二級トス、被選舉人ハ同級内ノモノニ限ラズ、兩級ニ通シ選舉セラル、コトヲ得ル

町村吏員

此選舉セラレタル議員カ、常ニ一堂ニ會シテ、事々評議スルニハアラズ、毎日其事ヲ取扱フモノハ、議員等ガ適任ト思フ人ヲ舉ケテ之ニ任ス、之ヲ町村吏員ト云フ

町村長助役

町村吏員ハ町村長、助役、收入役ノ三種ナリ、其中收入役ハ、常ニ俸給ヲ與フヘキモノトス、町村議員ハ四年毎ニ半數宛改撰ヲ行フ

收入役

郡會縣會

聯合會

郡會ノ以前、町村聯合會ナルモノアリテ、郡内ノ事柄ヲ議セシガ、自治制實施セラレテヨリ、郡制ニ依リ、郡會ト改メ、其ノ議員ハ町村會議員ノ選

郡會

組合會

郡會ノ外、組合會ナルモノアリ、高等小學校ノ一
 ナ議ス、是レハ前學期教育制度ノ所ニ記シアレ
 バ、茲ニ省ク

府縣會

明治十一年詔シテ、府縣會ヲ開キ、縣内ノ政務ヲ
 議セシム、而シテ其ノ議員タルモノ初メハ公衆
 一般ノ民ヨリ選舉セシガ、自治制實施後府縣制
 ニ依リ、郡會議員ノ選舉スル所トナリ、總テ事ヲ
 簡易ニシテ、何事モ多ク町村議員ノ權限トナレ
 リ

町村議員ノ
 勢力

舉スル所トナレリ、郡ノ休戚ハ郡會議員ノ適否
 ニ依ルモノナレバ、郡會議員ノ選舉ハ、最モ慎ム
 ベキモノナリ

郡縣會議員ハ四年毎ニ半數改撰ヲ行フ

- 縣會議員ノ
 姓名
- | | | | | |
|-------|----|--------|----|--------|
| 行德元濟 | 死 | 井上簡一 | 死 | 壇喜八郎 |
| 加藤松五郎 | | 中嶋右左衛門 | | 加藤增右衛門 |
| 矢野完 | | 伊東榮吉 | | 前田立磨 |
| 高瀬周圓 | | 蒲池武 | | 佐藤直治 |
| 蒲池浦太 | | 高山 | 死 | 千原藤一郎 |
| 森 | 現任 | 森 | 現任 | |

大山道路紛議

大山道路改築

大山道路ノ改築ハ、交通運搬上、實ニ緊要ノ事ニ
 シテ、本郡ノ進化ト商業トニ大ナル關係アルモ
 ノナレバ、明治二十一年頃、開通ノ說、隈町ヨリ起

洪水ノ爲メ
中止

協同工事

費金配割不
當

反對廢止論

請願

説諭頻々

リ道路委員マテ撰舉セシガ、廿四年洪水ノ爲メ
中止シ、廿五年ニ至リ、此ノ説再發シ、隈町ヨリハ
寄附金ヲ出シ、三芳村大山村ノ協同工事トナリ、
村會ノ議決ヲ以テ、費金ノ募集ニ着手セシガ、其
ノ全費一万余圓ノ多額ニテ、且ツ配割方、其ノ當
ヲ得ズ、貧民ハ戸數割ノ負擔ニ堪ズトテ、多數ノ
反對者現レ、況シテ最初四ケ年ニ成就スベキ見
込ナリシヲ、二ケ年ニ完結セント爲セシヨリ、反
對廢止ノ論彌囂シク、議員ノ壓制ヲ憤リ、村民七
八分モ同盟シ、村長ニ向テ延期ノ請願ヲナシ、後
ニハ進ンテ郡役所ニ迫ラントシケレハ、郡吏ハ
頻ニ出張シテ説諭ヲ加ヘ、遂ニハ郡長モ出張ア

中止ノ姿

工事大ニ過
グ大河運搬ノ
便

必要工事

長足ノ進歩

ツテ、親シク諭サレシモ、更ニ之ヲ聽カス、如何ニ
スレドモ、費金ヲ納メザルヨリ、結局中止ノ姿ト
ナレリ、是レ畢竟工事大ニ過ギ、民力ノ負擔ニ堪
ヘサル所ニシテ、斯クセズトモ自然ノ大河アル
故、産物運搬ノ便更ニナキニアラサレバ、工事ヲ
小ナクシテ、着々事ヲ就サント云フニ在ルガ如
シ(請願書ヨリ推考)併シ大山道路開通ハ必要ナ
リ、利益ナリ、孰レノ日カ成功セザル可ラザル事
業ナラン

憲法政治

我が大日本帝國ハ、非常ノ速力ヲ以テ、驚ク斗リ

憲法發布

相戰フテ後
ニ憲法ヲ得
ル

和樂ノ間無
事大典ヲ舉
グ

帝國會議

ノ大進歩ヲナシ、二十二年二月十一日ノ紀元節
ヲ以テ、憲法發布ノ大典ヲ舉行セラル、萬世不易
ノ國本ヲ定メサセ給フ、詔ノ下ルヤ皇城ハ申ニ
及ハズ、都會ヨリ山村僻地ニ至ル迄、皆歡宴盤舞
シテ、相慶祝セサルハナシ、蓋歐洲諸國ノ憲法ヲ
得ルヤ、大抵君民相戰ヒ、甚シキニ至リテハ萬乘
ノ君主ノ首ヲ斷ツ等、暴逆至ラサルナシ、然ルテ
獨リ我ガ國ノミ君臣和樂シ、泰平無事ノ間ニ於
テ、此ノ大典ヲ舉ゲ得タルハ、全ク 聖天子無量
ノ鴻恩ニ出タリ、是實ニ臣民ノ紀念トスベキ大
慶事ナリ

廿三年十一月ヲ以テ議員ヲ召集シ、帝國議會ヲ

開設セラレタリ、今衆議院撰舉法ノ大略、及本縣
ノ撰舉區ヲ示サン

撰舉區

第一區大分郡一人、第二區大野直入郡一人、第三
區南北海部郡一人、第四區速見玖珠日田郡一人
第五區東西國東郡一人、第六區下毛宇佐郡一人

撰舉人

撰舉人資格
年齡二十五歳以上ノ男子
直接國稅十五圓以上ヲ納ムルモノ
其ノ府縣内ニ本籍ヲ定ムルモノ

被撰人

被撰人資格

三十歳以上ノ男子
其ノ府縣内ニ於テ直接國稅十五圓以上ヲ納ム
ルモノ

別則

被撰人タル
ヲ得ザルモ
ノ

官内官、裁判官、取稅官、會計官、警察官、神官、僧侶、教
師ハ被選人タルヲ得ズ
府縣郡ノ官吏ハ、其ノ管轄内ニテ、被撰人タルヲ
得ズ
風癩白痴、及罪科アルモノハ、被選人並ニ撰舉人

華族ノ當主
選舉期日
改選年限

タルヲ得ズ
華族ノ當主ハ被選人選舉人タルヲ得ズ
選舉期日ハ三十日前ニ公示スル
議員ハ四ヶ年毎ニ抽籤ニヨリ半數改撰ヲ行フ

代議士

第一區
元田 肇 第一期
安藤 九華 第三期

第二區
朝倉親爲 第一期
同 第二期
同 第三期

第三區
箕浦勝人 第一期
同 第二期
同 第三期

第四區

宇佐美春三郎 第一期
廣瀨貞文 第二期
廣瀨貞文 第三期

第五區

安藤九華 第一期
元田 肇 第三期

第六區

是恒真揖 第一期
山口半七 第三期
元田 肇 第二期

貴族院

貴族院ノ成立

皇族、華族ノ内、並ニ勳功學識アリテ勅撰セラシモノ、及一府縣ヨリ一人ノ多納稅者(七年期)ヨリ成立ツ

多納稅議員

大分縣多納稅議員 水ノ江 浩 第一期

銀婚式

銀婚式園遊會

銀婚式トハ譯語ナリ、西洋ニテハ、一年綿婚、二年紙婚、三年革婚、五年木婚、七年羊毛婚、十年錫婚、十二年絹麻婚、十五年水晶婚、二十年磁器婚、二十五年銀婚、三十年真珠婚、四十年紅寶石婚、五十年金婚、七十五年金剛石婚式等アリテ、此ノ祝日ニハ婚名ノ物質ニ招待狀ヲ印刷シ、來客ハ婚名ノ物質ヲ以テ作レル花環ヲ贈ル例ナリ

大婚二十五
年ノ御祝儀

本年ハ我が勲聖ナル
天皇 皇后兩陛下、大婚二十五
年ノ御祝儀ニ當
ラセ給ヒ、三月九日則チ當初御結婚日ヲ以テ、其

老人ニ恩賜
ス
特赦

ノ御式ヲ舉ゲサセラレ、全國八十以上ノ老人ニ
ハ恩賜アリ、國事犯罪人ハ特赦ニ遇ノ寛典アリ、
實ニ 皇朝未曾有ノ大典ニシテ、聖德無量夫
婦相和ストノ御聖勅ヲ御實踐遊サセラレ給フ、
最トモ畏キ御祝儀ニシテ、熟々古史ヲ案ズルニ
皇朝ニテ 兩陛下御揃ヒ二十五年ヲ御健全
ニ過サセ給ヒシハ 神武 應神 仁德 欽明
醍醐ノ五帝ニマシマシテ、最ト例少ナキ事ナ
レバ、殊更畏ク目出度覺ヘ待ラレケリ
此日大原社内ニ於テ、本郡官民混同ノ園遊會ヲ
催シ祝意ヲ表セリ、是亦本郡未曾有ノ盛會ニシ
テ、會員無慮五百余名、肩摩雜沓ノ中ニ、霽然タル

五帝

官民混同ノ
園遊會

會者五百名

祝聲四ニ聞
ニ

和氣滿ナ、上下睦一ノ歡聲洋々トシテ、高ク九霄
ニ響ケリ、其他村々、戸々、苟モ人烟起ル所ハ、朴舞
欣賀ノ聲ヲ聞カザルハナシ

附記

熟々本郡既往ノ歴史ヲ案ズルニ、大古ハ普通ノ質杜ヲ
以テ起リ、中古豪族時代ハ政令簡易ニシテ民人生ヲ安
シ、戰國ノ世ニハ勇悍強健ヲ以テ、隣境ノ感稱ト忌憚ト
ヲ享ケ、降テ代官政治トナリ、治外法權ノ特典ト、諸藩ノ
財政ニ預リシ余澤トナリ、人ハ勇敢ニシテ、貨財足リ、
富強殷昌天下能ク及ブナク、加フルニ文學興テ、之ヲ粧
點シ、秀靈ノ山川ト、俱ニ其ノ美ヲ争ヒ、炳煥トシテ光輝

ナ四海ニ放テ、實ニ金國樂地ノ名ニ背カザリシ、然ルニ
天下ノ大勢ハ、一小倅土ノ休戚ヲ顧ルニ遑ナク、滔々乎
トシテ維新ノ大業ヲ促シ、大詔一タビ降テ、王政古ニ
復シ、日田ノ富源ハ、之ガ爲ニ奪ヒ去ラレ、文進ノ氣運ハ
駭々乎トシテ、鎖國ノ舊習ヲ破シ、開交ノ國是トナリ
タレバ、金國樂地ノ譽ハ、變シテ狐狸ノ巢窟ト嘲ラル、
ニ至ラントス

今ヤ往昔ノ日田風、何處ニ在ルカ、山ヲ拔キ虎ヲ搏ツ、百
折不屈ノ氣象ハ去テ、衣食ニ華ヲ競ヒ、遊興ニ豪ヲ戰ス
ノ末路ヲ映シ來リ、肩ヲ上ゲ肩ヲ怒ラシ、以テ天下ニ誇
呼セシ、日田文學ハ徒ニ其ノ花殺ヲ止メテ、開明人種ノ
冷笑ニ供シ、其ノ果實ニ至テハ、寂トシテ之ヲ求ムルニ

術ナシ、曾テ富饒ナリシ日田金ハ、我が郡人ヲ驅テ、正經
ノ職業ヲ忌ム、遊逸懦弱ノ弄坑ニ陷レ、或ハ同屋互ニ相
猜ミ、憤喧小利ヲ争フテ、玉石俱ニ斃ル、ノ歎ヲ招キ、或
ハ兄弟牆ニ鬪ギテ、奸狗ノ間ニ乘ズル悔ヲ醸サントス、
那ゾ夫レ疹痒ノ甚シキヤ、蓋シ是レ盛衰ノ數ニ據ルモ
ノナラン
左ハ左リナガラ、日田ノ富源ハ悉ク涸レタルニ非ズ、求
メント欲スレバ之ヲ得ルニ難カラズ、日田人士ノ生氣
亦全ク泯ビタルニ非ズ、妖雲一時之ヲ遮リシノミ、爲サ
ント欲シテ何ノ成ラサルイカアラン、昨今有爲ノ才物、
路ニ當リ、具眼ノ識者亦將ニ出デントス、日田ノ名聲ヲ
回復スルハ、蓋シ易々タルノミ

然レドモ之ヲ永久ニ維持シ、日進ノ世潮、優勝劣敗ノ競争社會ニ立テテ、毅然頭角ヲ擡メザルニ至テハ、其事ノ大ニシテ、其ノ任重シ、是ヲ爲スヘク如何、交通ヲ弘メ、異郷ノ往復ヲ頻繁ニシテ、交テ他邦ノ人ニ求メ、小利ヲ攫取スルニ汲々タル管見ヲ去リ、猜疑構陷策ヲ止メ、一家相害フノ卑心ヲ撤シ、協同一致以テ曠世ノ利益ヲ計リ、浮華淫佚ノ陋習ヲ、秩序的ニ改良シ、實業ヲ勵マシ、殖産ヲ企テ、教育ヲ盛ニシテ、以テ郡内ノ實力ヲ製造スルニ在リ
抑モ教育ハ、萬事ノ基礎ナレバ、其ノ關涉スル所、極メテ大ニシテ、一家ノ幸福、一郡ノ盛衰、一國ノ休戚、皆収メテ教育ノ如何ニアリ、教育ノ責任豈亦重大ナラズヤ、本郡

ノ如キハ如何ナル教育ヲ施シテカ、十全ノ効ヲ奏スベキ、他ナシ古ノ日田風ヲ煥發シテ、不屈ノ力行家ヲ養成シ、郡民ノ一分ヲ以テ學者、藝術家トナシ、一分ヲ以テ工業技術家トナシ、一部ハ以テ商業家トナシ、他ハ擧テ殖産興業ニ從事セシムルニアリ
然リ而シテ、男子ヲシテ此ノ職務ニ拮据シテ、國家ノ利益ヲ計ラシムルニ於テハ、女子ノ教育亦格別ノ必要ヲ感ズルナリ、女子ハ賢良ニシテ、經濟ニ巧ニ、庶務應對ヲ司リ、家政ヲ理シ、日進ノ社會ニ立テテ後ル、コトナク、老後ノ幸福ヲ依托スベキ賢兒ヲ擧ゲ、男子ヲシテ内顧ノ患ナカラシメザル可ラズ、女子ノ責任亦重カラズヤ、家政ヲ理シ賢兒ヲ擧グ、教育ナクシテ如何ゾ之ヲ能セ

田田
ノ、女子ノ教育豈忽ニスベケンヤ
夫レ富家ノ子弟ハ教育ナキモ、自ラ幸福ヲ得ルノ道ナ
キニアラザレド、貧家ノ子女ニシテ教育ナクンバ、何ヲ
以テカ生涯ノ幸福ヲ求ムベキ、貴族學校固ヨリ必要ナ
リ、貧民教育豈亦忽諸ニ附スベケンヤ、且ツ教育ナキ女
子ハ男子ノ進歩スルニ從ヒ、一段宛己ノ家格ヨリ降テ
嫁カサル可ラサル自然ノ状態ヲ現シ、己ノ家門ヲ辱シ
メ夫ノ家ヲ誤リ他日ノ國家タル兒童ヲ害フ、豈恐レテ
慎マサル可ケンヤ
噫日田郡ニ於ケル諸子ノ責任大ナリト云ヘシ、勉メヨ
男子、奮ヘヨ女子、諸子ガ他日各其ノ職ニ當リ、精勵拮据
産ヲ起シ、一家和合琴瑟ノ樂アリテ、日田ノ光輝普ク宇

内ヲ照スノ日、予ナシテ再ビ日田歴史ノ續編ヲ作ラシ
メヨ

北豊宇佐山院

小野藤太誌

明治廿七年六月二十五日印刷
明治廿七年七月十日發行

(非賣品)

著作兼
發行者

大分縣宇佐郡高並村
百七拾壹番地

小野藤太

印刷者

大分縣日田郡豆田町
六百六拾參番地

松本萬吉

印刷所

大分縣日田郡隈町
貳百六拾九番地

日田活版所

